

にちぎん

2016 NO.45

春



インタビュー 扉を開く

戸田奈津子 映画字幕翻訳者・通訳

「字幕翻訳」——好きだからこそ切り拓いた道

地域の底力

館山市 千葉県

都市生活ものどかな暮らしも幸せを選べる千葉県館山市

対談 守・破・創

北川フラム アートディレクター

原田 泰 日本銀行政策委員会審議委員

美術家と地域住民が共鳴して「芸術祭」が創られる

エッセイ “おかね”を語る

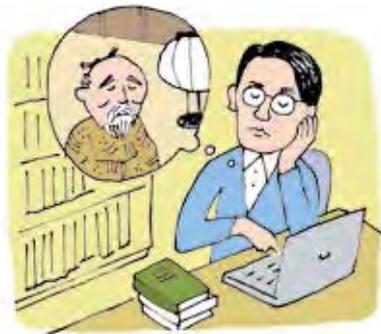
円城 塔 作家 貧福論

昨年、なんの拍子か、上田秋成の『雨月物語』を現代語訳することになった。いわずと知れた江戸時代の怪異譚を集めた読本である。溝口健二監督による映画の影響もあり、おどろおどろしいイメージがある。

全九話を取め、その第一話は、日本三大怨霊の一人、崇徳院と西行法師の掛け合いである。『菊花の約』、『夢応の鯉魚』、『青頭巾』などはよく知られた話だが、最終話の『貧福論』まできちんと読んでいる人は少ないのではないか。

陸奥の国蒲生氏郷の家に、岡左内という武士があった。貯蓄を趣味にしている。私欲ではなく、金は武器より有用だから集めている。武士として、世を治めるのに有用なものを集めるのは当然である、という理屈なのだが、なかなか世の人の理解はえられない。そんな左内のもとへある夜、小さなお爺さんの姿をした、金の精が現れた。

金の精としても、金持ちはごうつくばりのごろつきばかり、無慈悲、無惨な者ばかりであると言われるのはつらい、という。ついでには、金の精が日々思うところの、金の徳というものを解き明かしたい、とのことである。『史記』や『論語』、『中庸』などを縦横に引き、金の



絵・江口修平

貧福論

円城 塔

性質というものをとつとつと説く。左内も日頃思うところがあつたから、こちらも胸の内を打ち明けて、金の素晴らしさについて夜明けまで語り明かした。結論としては、経済に長けた徳川家が世を牛耳ることになるだろう、として終わる。

怪異ではあるが、特に怖い要素はない。無理矢理に怖いところを探せば、何かに憑かれたように延々と語り続ける二人の口調だが、それはいわゆる怪談の怖さとは異なる。

怨霊にはじまり、経済話で終わるといふのはなかなか意表をついた構成であり、この点について深く掘り下げた論考はないのではないかと思う。

上田秋成は、商家に育つた。のちに破産し、医者に転ずる。晩年は知人の家を転々とし、暮らしぶりは貧しかった。

「善を賞し、悪を罰する役目は、天であり神であり仏の仕事。天、神、仏、この三つが人間の道である。道はわれら物質の関与するところではない」

と金の精は言う。金は物質だから、人間の情とは関係がない、とも。

現代語訳をしていて一番面白かったのは、実はこの『貧福論』だった。

えんじょう・とう●1972年北海道生まれ。東北大学理学部物理学科卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。2007年『オプ・ザ・ベースボール』で文学界新人賞受賞。10年『烏有此譚』で野間文芸新人賞、11年、早稲田大学坪内逍遙大賞奨励賞、12年『道化師の蝶』で芥川賞、14年『Self-Reference ENGINE』でフリップ・K・ディック記念賞特別賞をそれぞれ受賞。12年、早逝した伊藤計劃氏の未完の絶筆を引き継いだ『屍者の帝国』が話題に。近著に『シャッフル航法』『エビログ』『プロログ』など。





2 エッセイ／“おかね”を語る
貧福論 作家 円城 塔



4 インタビュー／扉を開く
戸田奈津子 映画字幕翻訳者・通訳
「字幕翻訳」——好きだからこそ切り拓いた道



9 地域の底力——千葉県館山市
都市生活ものどかな暮らしも
幸せを選べる千葉県館山市

16 対談／守・破・創
北川フラム アートディレクター
原田 泰 日本銀行政策委員会審議委員
美術家と地域住民が共鳴して「芸術祭」が創られる



新連載
20 貨幣の世界——① [形 その1]
古代オリエントから欧州

26 FOCUS → BOJ 18 前橋支店を訪ねて
多岐にわたる支店の仕事

日本銀行のレポートから

30 「経済・物価情勢の展望」(展望レポート) —2016年1月—

32 「地域経済報告」(さくらレポート) —2016年1月—
地域の視点「各地域における企業の雇用・賃金設定スタンス」



36 トピックス
創業支援に関する地域ワークショップを開催ほか

39 AIR MAIL from London
ロンドン中心部の住宅街の一風景

表紙のことは



表紙・画 北村公司

日本銀行神戸支店は、日本銀行の第一六番目の支店として、昭和二年（一九二七）六月に開設されました。折しも日本中が未曾有の金融恐慌に見舞われていた頃であり、神戸支店の開設もその影響を大きく受け、当初の予定から一カ月遅れとなりました。

表紙の初代店舗は、大正十二年（一九二三）の関東大震災の発生を受け、より耐震性・耐火性を高めた鉄筋コンクリート造りの堅牢な建物でした。そのため、昭和十三年（一九三八）の阪神大水害、昭和二十年（一九四五）の神戸大空襲という大きな試練に遭遇したにもかかわらず、倒壊を免れました。ちなみに、戦時中は空襲の目標物とならないように、建物全体が真っ黒に塗られていたそうです。

その後、戦後の経済発展に伴う事務量および職員数の増加により建物が手狭になったため、昭和三十六年（一九六一）、道を隔てた向かいに現在の店舗を新築しました。支店前の通りでは、平成七年（一九九五）より、阪神・淡路大震災の犠牲者の鎮魂と街の復興を祈るイベントとして始まった「神戸ルミナリエ」が開催されています。

映画字幕翻訳者・通訳

戸田奈津子

Natsuko Toda

『地獄の黙示録』『E.T.』『レイマン』『タイタニック』……数々の名作の字幕翻訳者として知られる戸田奈津子さん。三〇年以上の間、第一線で活躍を続けて、これまでに手がけた映画字幕は約一五〇〇本!「職人芸」のような字幕翻訳の仕事で、戸田さんが大事にしてきたことは何か。映像技術の進歩に伴う字幕の環境変化、映画の未来像、ハリウッドスターの素顔の紹介まで、幅広く語っていただいた。



取材・文 小堂敏郎

写真 野瀬勝一

「字幕翻訳」

好きだからこそ切り拓いた道

セリフのエッセンスを一秒・二字で表現する

——私は洋画が大好きなのですが、エンドロールで戸田さんのお名前を何度拝見したでしょうか。長年にわたって手がけられてきた字幕翻訳とは、単なる技術ではなく、芸術の域に達しているようにも思われるのですが。

戸田 字幕は「芸術」などではなく、「職人芸」です。字幕によって映画の物語をわかってもらうことが大事で、字数が少ないからセリフ



「KEEP ON DREAMING 戸田奈津子」
(双葉社) より

のエッセンスを的確に短く、詰めていく。セリフをただ切り取るのではなく、そのシーンにふさわしい翻訳の表現を考え、画面に出せる文字数に合わせ、字幕をつくっていく作業です。

——字幕は、一瞬のうちに画面に出たり消えたりしますが、あれは何文字あるのでしょうか？

戸田 お客様は画面を見ている合間にちらっと字幕を読むわけですから、非常に限られた文字数しか頭に入りません。その制限は一秒間に三〜四文字ということになっていきます。ですから、パッと見た字幕を瞬時的に理解してもらうためには、だれにでもわかりやすく表現せねばなりません。耳慣れない言葉とか、若い人たちにだけわかる流行語などを使うと、戸

惑うお客様もいるでしょう。読み切れないまま字幕が消えたら、映画の物語が理解できないまま先に進んでしまいます。お客様が一瞬でも戸惑ったり、文字を読み切れなかったりして、映画の鑑賞を妨げるような字幕は、良い字幕とは言えません。

——字幕はセリフのエッセンスを凝縮し、詰めていく職人芸だと。その芸を身につけるために、どういう訓練を受けたのですか？

戸田 この職業には専門の訓練施設のような場がありません。日本は、外国映画を字幕で鑑賞する習慣が定着している珍しい国です。他の国は吹き替えが主流。そんな中で、字幕の草創期に翻訳を担当していたのは、映画会社に勤める外国語が堪能な社員でした。この方たちが戦後、会社から独立して字幕翻訳者になっていった。字幕翻訳は、その始まりのところから、

人に教えたり教わったりすることがない一匹狼の職人芸だったんです。

私の場合は、腰掛けの会社勤めをした後、いろいろなアルバイトをしながら、字幕翻訳の世界を目指していました。そして『地獄の黙示録』の字幕を担当してから依頼がどんどん舞い込むようになり、現場で試行錯誤を繰り返して、自分なりの字幕翻訳を身につけていったという感じでした。

——職人芸となると、字幕翻訳者ごとに文体に特徴が出そうですね。

戸田 字幕の分量は、セリフごとに二字〜二五字の字幕が出るとして、二時間の映画でスクリーンに出る字幕枚数が平均一二〇〇枚くらいになります。字幕だけをまとめて読むことはないでしょう。読めば、人によって文体が違ってくると思いますけど、字幕はあくまでも映像あつてのものでしか



とだ・なつこ●東京都出身。津田塾大学英文学科卒業後、保険会社に約1年半勤務した後、英語関連のアルバイトをしながら字幕翻訳者を目指す。1970年公開の『野性の少年』で映画字幕デビュー。79年、フランシス・コッポラ監督の推薦を受け、超大作『地獄の黙示録』を担当し、字幕翻訳者の第一人者としての地位を確立。以後、『E.T.』『アマデウス』『レインマン』『タイタニック』『ミッション：インポッシブル』など約1500本の作品を手がける。現在も字幕翻訳の第一線で活躍するかたわら、来日する海外のトップ・スターの通訳やアテンドも担当する。おもな著書に『字幕の花園』（集英社文庫）、『スクリーンの向こう側』（共同通信社）、『KEEP ON DREAMING』『ときめくフレーズ、きらめくシネマ』（いずれも双葉社）などがある。

ら、映像と一緒にでなければ存在価値がなく、それだけ読んでも、全くおもしろくありません。

——ところが、映像と一緒にになると、相乗効果によって字幕の意味が浮かび上がってくる。

戸田 ええ。ロマンチックなシーンに想いをこめた俳優の声や表情が重なる、「君が好き」というだけの単純なセリフがいかにロマンチックな意味を放つ。お客さんのそういう錯覚を利用するのも、字幕翻訳のおもしろいところです。

——映画の登場人物の「思い」も字幕から伝わってきます。

戸田 映画で描かれるドラマって、エモーショナルなものでしょう。お客さんがそれを楽しめるように、字幕をつくらなくてはいいけません。悲しい場面では泣けて、おかしな場面では笑えるように、字幕から伝わらないとだめです。

でも、「笑い」を字幕にしているのは難しいですね。感動したり、泣いたりという感情は世界共通で、言葉を超えてだれでも理解できると思います。「笑い」だけは、そうはいきません。例えば駄洒落は、その言語を知っているという土台があるから笑えるんです。英語の

土台をシェアしていない日本人に、英語のジョークは通じないし、まして字幕の文字だけで笑わせるなんて至難の業です。

——最近の映画館は国際化して、日本人と外国人と一緒に観る機会も増えましたが、鑑賞中に笑いのタイミングがずれたりすることがあります。

戸田 外国人が笑っているのに、日本人はしらっとしていることも

CG中心の映画で字幕翻訳の作業が変わった

——いろいろな作品の依頼があると思いますが、どの映画の字幕を担当するか、戸田さんが決めるのでしょうか。

戸田 私が決めることはまずないです。あくまで映画会社からいただいた作品を担当します。立場上、字幕翻訳者は受注側ですから。忙しくて時間がないときはお断りしますが、試写を観てから「つまらない作品だから嫌です」などとは言えません。試写を観たら、最後です。字幕を引き受けることにな

あるでしょう。そうすると「字幕が下手だ」と言われて、ガックリします。そもそも日本人は映画を鑑賞するときは目で、あまり泣いたり笑ったりしません。だから外国人の監督や俳優は、お客さんが期待どおりに反応しないと、びっくりするわけです。それを字幕の責任にされるときは、字幕翻訳者って損な役回りだなあと感じますね。

りますね。

——字幕翻訳の作業は試写を観ることからはじまるのですか。

戸田 私は試写の後、シナリオのセリフを見ながら、同時に耳で聴いてニュアンスを確かめて字幕をつくっていきます。ただ、ここ数年、字幕をつくるテクニカルな面で環境が大きく変わってきました。

——どのような変化でしょうか。

戸田 昨年公開されたCG（コンピュータグラフィックス）映像の多い『007 スペクター』を



「KEEP ON DREAMING 戸田奈津子」(双葉社)より

例にとりましょう。映像技術者たちが、コンピュータの中で映像をつくるわけですが、手をかけていい映像にするために、なかなか作業が完成しません。それが封切りギリギリまで続き、我々翻訳者の手に映像が来ないのです！ 映画がフィルムだった時代は、一度プリントした映像はいじれなかったのに、現在のデジタル映像は何度でも修正できます。

そのために翻訳者は刻々と追ってくる封切り日を横目に、いつ完成映像が届くのかと地団駄を踏んで待つことが日常化しました。今回の『007』も最終映像がなかなか届かず、封切り前の一週間で何とか字幕原稿を仕上げるといふ状況でした。

—— そうなると、試写を観てから字幕にとりかかる、という手順も変わったのでしょうか。
戸田 フィルム時代は試写室でフィルムをかけて新作を観るといふ手順でし

たが、今はデジタルです。つまり新作の映像は空中を飛んで、わが家のパソコンに送られてくるのです。もちろん映像が途中で盗まれ、海賊版などが出たら大変ですから、映像のデータには厳重なセキュリティがかけられ、複雑なパスワードで守られています。ITにヨワイアナログ人間の私がパスワードと格闘する羽目になるのです。こういう時は心底、ITの進歩を呪いたくなります。

—— 字数の制約とか、字幕翻訳の内容にも変化がありますか。
戸田 どんなにITが進歩しようと、翻訳自体は何も変わっていません。英語を日本語にする翻訳自体に変わりはないし、字幕の制約も一秒間に三〜四文字のまま。人

—— 昨春秋に公開された『ラスト・ナイツ』では、字幕について戸田さんと監督で話し合ったとお聞きしました。

戸田 字幕翻訳者が外国映画の監

がしゃべるスピードは昔も今も変わらないし、人が字幕を読むスピードも昔より速くなっただけではありませんから。
むしろ若い人を中心に活字離れの現象が起きている影響なのか、「字幕

に追いつけない」という人が増えていきます。外国映画を字幕で観るようになった理由の一つに、日本人の識字率の高さがあると私は考えているのですが、それがあやしくなってきたり、吹き替え版を好むお客さんが増えている現実が、それを物語っていると思います。

映画の世界に導かれ、好きな仕事で生きてきた

督と接触するということは、通常、皆無です。しかしこのハリウッド映画は日本人監督の紀里谷和明氏の作品でしたから、異例にも監督と顔を突き合わせ、一語一句、あ



あしように、こうしようと直しながら字幕をつくることができました。理想的な字幕づくりですが、通常は地理的にも、時間的制約を考えると無理なのです。

—— 日本語を母国語とする監督が、外国映画を撮ること自体少ないような気がします。

戸田 海外で活躍する日本人俳優も少ないでしょう。一つの大きなネックはやはり言葉だと思います。その中でケン・ワタナベ(渡辺謙氏)の『ラストサムライ』はすばらしい出来でしたが、日本人俳優がフルに力量を発揮できるあのような映画は数十年に一本? とにかく稀です。一方、技術部門を見ると、最近、ハリウッドで活躍している



「KEEP ON DREAMING 戸田奈津子」(双葉社)より

日本人がとても増えています。監督や俳優にはとてもハードルの高いハリウッドですが、映像技術だったら、実力さえあれば日本人にもチャンスが開けています。

——A・シュワルツェネッガーやS・スタローンは、なまりの強い英語でも演技力が高く評価されていますね。

戸田 主演の『ターミネーター』や『ロッキー』の役柄に合わせているのでしょう。普段はあんなになまっていないですね。二人ともマッチョなイメージが強いと思いますが、じつはとっても頭が切れる。今までいろいろなハリウッド俳優に会いましたけれど、頭のよさではトップクラスです。アメリカ生活三〇年以上のシュワルツェネッガーは、完璧な英語を話せる

はです。でも彼は自分のトレードマークとして、あの長いドイツの名字となまりを計算して残しているのだと私はいらんできます。

——戸田さんは字

幕翻訳を手がけながら通訳もされています。海外のトップ・スターと交遊されたり、各国に出かけられたり、常に世界と接しているらしいです。

戸田 いえいえ、私は本当に井の中の蛙です。日本以外で暮らした経験は一日とないし、日本で字幕の勉強をして、日本で仕事をしてきました。海外に旅行しても、現地の暮らしの中まで入っていくことはありませんから。

でも、振り返ると、私は子供のころから「未知のものを観たい」という気持ちは強かった。本や映画の中でイメージの世界を膨らませて、フィクションの世界にトリップしたり、主人公と同じ体験をする想像をしたり……。今も字幕翻訳の作業をしているときは、頭の中で映画の世界にとんでいきます。セリフを字幕に翻訳しながら、そのキャラクターと一緒に冒険をしたり、素敵な恋をしたりする。現実の自分は何もアドベンチャーしていないけど、楽しい疑似体験です。

——字幕翻訳者という、けっしてポピュラーではない職業を志した

こと自体、アドベンチャーだったように私は思います。

戸田 そういう意識は自分の中には全くありませんでした。ひたすら映画が好きで、ドラマの世界にひたりたい、字幕の仕事をしたという気持ちだけでした。そして自分が字幕に助けられて映画を楽しんだように、映画の楽しさを皆に味わってもらいたいと思ったんです。

——それで生計も立ててこられたのは素晴らしいことだと思います。

戸田 本当にラッキーだと思っています。好きなものなかに、私の生きる道があったのですから。イヤなことは切り捨てる人生でした。多くを捨てましたが、そのおかげでストレスとも関わりをもたないでこられたと思っています。

——アナログからデジタルへ一層進歩していくと、これから映画はどうなるでしょうか。

戸田 今は変化の途中段階ですが、映画館で映画を観る時代は、いずれ終わりを告げるでしょうね。デジタルで配信が可能になったので、映像が各家庭のモニターに送られてきて、オン・デマンド

で映画を観るということになるのでは？

今はCG映像のスーパーヒーロー物が大人気ですが、二〇世紀の映画ファンが『ローマの休日』とか『アラビアのロレンス』から得たような喜びや感動を残す作品は少なくなっているように思えます。特撮満載のスーパーヒーロー映画が何十年後まで感動を残すでしょうか？ これからも内容の濃い映画がつくられてゆくことを。そして字幕が引き続き、映画を楽しむお手伝いをしてくれることを念じています。

——本日は、貴重なお話をどうもありがとうございました。

(聞き手／情報サービス局長・高橋経二)





地域の底力

都市生活も のどかな暮らしも 幸せを選べる 千葉県館山市

房総半島の先端に位置する、
海に囲まれた館山市には、
のどかな田舎と都市機能の、
双方を併せ持つ、
懐深い魅力があった。



取材・文山内史子
写真 野瀬勝一

2010年に完成した約400メートルの「館山夕日栈橋」は、栈橋形式としては日本で最も長い構造。写真の帆船「日本丸」のような官公庁船や、「にっぽん丸」をはじめとする大型客船が寄港する際には、その美しい景観がいつそう引き立つ。(館山航空隊撮影)

都市圏の田舎 選択肢のある移住

人口約四万八〇〇〇人の千葉県館山市は、房総半島の先端、東京湾の入口に位置する。戦国時代から江戸時代初期にかけては、里見家が治めていた安房国。滝沢馬琴による『南総里見八犬伝』の舞台であり、再建された館山城が今も街を見守るように建つ。

千葉県内では、東京からもっとも離れた地域。地図上、湾岸をく



るりたどると、ずいぶん距離があるようにも思える。しかしながら、東京湾アクアラインを利用すれば、都心から車で約八〇分という近さ。現在、その利便性を活かし、官民手を組んだ移住への対応が行われている。

まずお話を伺ったのは、NPO法人「おせっ会」の代表、八代健正氏だ。二〇〇七年の設立以来、相談の窓口となり、約一五〇世帯の移住をサポートしてきた。

発足当時は、田舎暮らしの第二次ブームが到来していた頃。団塊の世代の大量退職も見込まれていた。未来の人口減少をふまえての立ち上げだったが、正直なところ、



1982年に再建された館山城は、「南総里見八犬伝」の博物館として版本や錦絵などが展示されている。周辺の城山公園は、桜や紅葉の名所。散策を楽しむ市民も多い。

館山市経済観光部商工観光課担当課長・亀井徹氏（左）と、移住の相談窓口であるNPO法人「おせっ会」代表・八代健正氏（右）。官民が協力して、移住対策に取り組んでいる。



距離を考えれば、館山はさほど田舎というわけではない。そうあらためて認識したことで、方向転換へと至ったそうだ。

「都市とつながっていたい、あるいは田舎のよさを味わいたい。価値観や幸福度の選

択肢を考えたとときに、双方の切り口を用意できるのが館山の一番の売りだろうと、今は思っているんです」

「おせっ会」誕生と同時期、行政サイドでも移住・定住担当の部署を設置。試行錯誤を重ねつつも、

暗模索の状況だったという。「当初はとにかく、館山では田舎暮らしができる、ということだけをアピールしていました。自然が豊かで、海がきれい。魚や鮎が旨い。いわゆる観光対策と何ら変わらなかったんです」

恵みをもたらす海は、釣り人にも人気。年間平均気温は一六度という温暖な気候で、一月早々からポピーをはじめいろいろな花々が景色を彩る。駅前から少々車を走らせれば、のどかな農村風景も広がり、いちご狩りを体験できる施設も。

実際、その魅力に惹かれた移住者は少なくなかったが、都心との



1999年完成のJR館山駅は、温暖な気候を象徴するような南欧風のデザイン。ロータリーには花壇が設けられ、一年を通して写真のポピーほか花々が観光客を迎える。

上／釣り人で賑わう週末の「館山夕日桟橋」。
下／外海に面した海岸でのサーフィン、穏やかな館山湾でのヨット、ウインドサーフィン、ダイビングなど、多様なマリンスポーツを楽しめるのが館山の魅力のひとつ。



に物語っていたのが面白い。

出勤前、海でひとときパドリングを楽しんできた八代氏は、誰が置いたかわからない山菜やみかんなどを、玄関先で見つけることが多々あるという。いわゆる、昔ながらのお裾分け文化が残っているのだろう。対して亀井氏は都会のご近所付き合いと同程度だという。

「館山に住みつつ、私の場合は農業とは無縁に暮らしてきました。田植えや稲刈りだといって田んぼに入ったことすらありません。幼い頃は近くの海岸で泳ぎましたが、ほかは普通の東京の暮らしとほぼ変わらないでしょう。館山は、都内への通勤通学や二地域居住も可能だと思います」

お子さんが東京の大学まで東京湾アクアラインを走る高速バスを利用して通う、亀井氏の言葉だけに実感がこもる。

興味深かったのは、「おせっかい」を介した移住者の年齢層だ。問い合わせを含め、相談のほとんどは若い世代だという。

「昨年度も、七五%が四〇代以下でした。当初は印刷物にかける予算がなく、インターネットを中心

に展開したのが大きかったのかもしれません。逆に、退職者の方たちは、自分で道を切り拓くことが多いんですよ」

サポートが必要なのは、子育てから、仕事、家、地域とのつながりまで手探りで進まなくてはならない世代。まさしく、おせっかいを必要としているのだ。

おせっかい。都会では失われつつある人間関係はその後、館山の随所で感じる事となる。

移住したのは、館山だからこそ

楽しみのある生活と、二地域居住。亀井氏が話していた「館山ならではの暮らし」を目の当たりに



東京から移住し、パッションフルーツの栽培に特化した「RYO'S FARM」を立ち上げた梁寛樹氏。実が熟すと、緑色から紫色へと変わる。温暖な気候とハウス栽培により、1年に2回収穫できるのが館山の特徴だという。



したのは、東京から移住し、パッションフルーツの栽培を手がける梁寛樹氏の「RYO'S FARM」だった。サラリーマン生活を経た後、梁氏は二六歳で館山での生活を始めた。

「もともと、サーフィンをやりたが館山には来ていたんです。次第に田舎で農業をやりたいという気持ちが生えなな、サーフィンと両立できることと、東京から車で二時間かからない近さが移住の決め手になりました」

まったくノウハウがないなかでのスタートだったが、「地域おこし協力

隊」制度にエントリーし、市の力添えを得て、地元の農家で研修を積んだ。

「若い男ひとりの生活ですから、近所の方たちがおかずを分けてくれたり、寝込んだときにはおじやをつくってくれたり。館山は、人が温かいですね」

そう、梁氏は家族を東京に残して一念発起したのだが、その東京とは公私ともに、今も日常的につながっている。

「家族だけではなく、週末には友達が頻繁に訪ねて来るんですよ。農作業の合間に海に行く毎日、みんなうらやましがります」

東京都内のマルシェ（青空市場）やイベントなどを利用し、販売は自力で。その地道な活動が実り、酸味だけではなく甘みをふくんだ「RYOS FARM」のパッションフルーツはファンを増やしつつある。

最初は慣れないことばかり。決して順風満帆だったわけではないが、常にサーフィンという支えが心にはあった。

「農家の息子でもなく、資金も経

館山の海に心惹かれて移住した、NPO法人「たてやま・海辺の鑑定団」代表、竹内聖一氏。手にしているのは、海岸で見つかったウミガメの頭蓋骨と椰子の実。自然の宝庫、沖ノ島をバックに。



沖ノ島はかつて文字通り島だったが、1923年に起きた関東大地震による隆起を発端とし、ほどなく陸続きとなった。砂浜は夏場、海水浴場として賑わう。



上／海岸では、さまざまな貝殻をはじめ漂着物を拾う「ビーチコミング」も楽しめる。下／沖ノ島の森には、タブノキなどの照葉樹やハマゴウなどの海浜植物が生い茂る。



験もない。自分のような人間が農業でやっていけたら、社会的なインパクトを与えられるのではない

かと思いますが、とくに一年目は大変でした。サーフィンがなければ、挫折していたかもしれませ

二〇〇四年に設立したNPO法人「たてやま・海辺の鑑定団」代表、竹内聖一氏もまた、館山の海に魅せられて東京から移住したひとりだ。

館山市の海岸線は、三四・三キロメートル。その半分は太平洋に、もう半分は「鏡ヶ浦」と呼ばれる

ほど波が穏やかな館山湾に面している。

「砂浜から岩場まで変化に富んでいるこの辺の海はとても魅力的で、多様な海岸動植物が生息している。あまり知られていませんが、サンゴの北限域でもあるんです。移住した当時、僕は完璧なよそ者目線だったので、春、田んぼにオタマジャクシがいるだけでもおもしろいと思うわけです。でも、地元の人には当たり前過ぎて、わからないんですよね」

その象徴が、陸続きで渡れる沖

ノ島。全周一キロメートルほどの小さな島には海岸動物に加え、縄文時代の遺跡や照葉樹林など、貴重な自然が残るが、かつては、あまり知られていなかった。ひと気の無い危険な場所だと思われ、地元の子供たちはかえって近寄らないようにしていたそう。

目の前に広がる海は地域の宝箱

沖ノ島探検やシユノーケリング、釣り体験など、竹内氏は館山の海をベースに自然体験ができるエコ

右／館山市経済観光部プロモーションみなど課課長・石井博臣氏。後ろは「渚の駅”たてやま」の「機場の水槽」。館山湾や海辺の生物を観察できる、子供たちに人気の場所。下／館山湾に建設された「館山夕日栈橋」。その名が示すように、美しい夕景が望める。晴れた日には、海の向こうを富士山が彩る。



ツーリズムを展開。都心近郊でありながら地の利を活かした活動が評価され、二〇〇六年度には日本エコツーリズム協会の「第二回エコツーリズム大賞特別賞」を受賞している。

海とふれあうツアーは人気を集めているが、今後はいかに地域の素晴らしさを地元を広めていくかがひとつの課題だとか。

「僕らが教えているのは、圧倒的によその子供が多い。地元の子供たちに、地域のことをもつと知ってもらおう活動がこれからの地域のために重要なんです。ただ、最近では、沖ノ島の楽しさや大切さを語る声が地元からも聞こえるようになっていきます」

竹内氏の表情がほころんだ。

もう一つ、館山の人々が地元を海を再認識するできごとがあった。二〇一〇年、約四〇〇メートルという、栈橋形式としては日本一の長さを誇る、「館山夕日栈橋」の完成だ。

館山市経済観光部プロモーションみなど課の課長石井博臣氏によれば、特定地域振興重要港湾に館山が選定されたことが、大きな転機になったという。

「館山港港湾振興ビジョンを国と県と市の共同でつくり、そこからハードの整備が始まりました」

栈橋は、大型の船舶が着けられるマイナス七・五メートルの水深を

持つ岸壁を有する。結果、「にっぽん丸」や「ばしふいっくびいなす」など大型客船が館山に寄港するようになった。

「寄港時にはセレモニーやお祭りのおはやしで出迎えるなど、市民ぐるみのおもてなしで歓迎していきます」

毎年八月に開催される「館山湾花火大会」は、クルーズの目玉。オプションツアーで、市内の観光地を散策する客も少なくない。

帆船「日本丸」や自衛隊艦船といった官公庁船も寄港し、船内見学を楽しむ機会も増えた。

「栈橋が道路から見えるので、船が着くと、皆さん興味津々で来ら



「渚の博物館」ほか、特産物を販売する「海のマルシェたてやま!!」や飲食店がある「渚の駅”たてやま」。館山湾に面したスペースにはウッドデッキが設けられ、景色を満喫できる。

れる。全国的には一般の人が入れなかつたり、停泊する船が見えなかつたりという港も多いなか、どなたでも入ることができ、船を間近でご覧いただけるのが館山ならではの特徴だと思っています」

二〇一二年には、栈橋を眺められる「展望デッキ」や「渚の博物館」、館山の海を再現した「海辺の広場」



「館山夕日栈橋」に大型客船「ばしふいっくびいなす」が寄港した際の様子。オプションツアーで乗船客が市内を散策するという、あらたな経済効果も生まれた。



毎年、館山湾鏡ヶ浦で開催される寒中水泳に参加するという、市長の金丸謙一氏。抱えているのは、市のマスコットキャラクター「ダッペエ」。房総の方言「～だっぺ！」が名前の由来。館山市民同様におおらかな性格とのこと。

などがある「渚の駅」たてやまも誕生。昨年には地元産品の販売所とレストランも完成し、週末は、観光客だけではなく、地元の家族連れやカップルでも賑わう。

「館山の人のとって、海は生まれたときからずっとあるもの。改めて地域資源を見直すのはなかなか難しいものですが、棧橋のおかげで市民の皆さんが目に向けてくれるようになりました」

「館山夕日棧橋」の西、館山湾の向こうには、富士山が望める。この景色もまた、館山の人にとってはあたりまえの眺めだが、都内から見るとはるかに存在感があり、見惚れてしまう。

出生率上昇につながった 頼れる子育て環境

夕日が彩る美しい富士山をとらえた写真を披露しつつ、館山の魅力をあらためて語ってくれたのは、市長の金丸謙一氏。なかでも関心が高まったのは、ここ数年、わずかではあるが、出生率が増えている状況だ。

「直近五年間のうちの四年間で、県下一位なんです。高齢者を支える若い人たちに館山に移住してもらいたい。子供を増やしていただきたい。それには、子育て環境を充実しなければなりません」

その一端を担うのが、「元気な広場」だという。ゼロ歳～六歳までの未就学児が保護者とともに利用できる屋内の育児施設。同様の施設は他の自治体でも見られるが、まさしく「広場」のような広い空間が館山の自慢だ。

訪れてみたところ、子供たちが思い切り駆け回れるほどの余裕がある。また、保護者は若い世代に限らず、祖父母が同行する姿も見られた。

「一番喜ぶのは子供たちかなと

遊具が揃う広々とした「元気な広場」では、それぞれに楽しみを見つけて過ごす子供たちの姿が見られた。保護者のための子育ての講座や育児相談日も設けられている。



思ったら、さにあらず。お母さん方でした。子育てを本で学んでも、実践はなかなか難しい。「元気な広場」では母親同士が話せるだけではなく、高齢者から子育ての経験を聞くこともできるんです」

隣接するコミュニティセンターには、保健師がいる健康課があるため、専門家にも頼れるそう。

心細いときには、誰かに相談できる場所がある。金丸市長の話は、「おせっかい」と重なるものがあつた。頼る、頼らないはそれぞれの自由に任せた、程よいおせっかい。田

舎と都市圏。館山の持つ二面性のちよど間に、「元気な広場」が位置しているようにも思えた。

さらには、コミュニティとして小学校の存在をも大切に考えていると金丸市長は語る。

「基本的に、統廃合はしない。したくない。小学校は地域のシンボルであり、その土地を思うノスタルジーにもつながる。子供が少なくなつたから統合するのではなく、そうならない仕組みや子育ての環境をつくりましょうと。現実には難しい場合でも、その気持ちが常に私の根底にあります」

力強い口調が、心に響く。選択



館山湾の向こうに富士山を眺められる景色もまた、館山の宝のひとつ。5月中旬、7月下旬は、夕日がちょうど富士山頂にかかる「ダイヤモンド富士」と出会うことも。



「房総フラワーライン」は房総半島最南端の海岸沿い約6キロのルート。春の菜の花をはじめ四季折々、花で彩られる景色が続き、「日本の道100選」に選ばれた。

を迫られたとき、行政の長に熱い思いがあるか否かは大きい。

「少子化は今に始まったことでありません。これをやったら全てもよくなる、一発ホームランの対策はない。原因を根本から減らし、五年後、一〇年後に結果が徐々にあらわれていく。そんな地味な積み上げが大事だと思っています」
 高齢者対策も、コミュニティに根付いている。

「サークル活動やボランティア活動、まちづくり活動など、高齢者の皆さんが主体になってください、どんどん働いてくださいと言っています」

そう金丸市長は話すが、現役から離ればおのずと、外に出る機会が少なくなるのではないか。率直に聞くと、笑顔が返ってきた。

「おかげさまで、館山には地域のコミュニティがまだ残っているんです。一〇の公民館に加えて各地域に集会所があり、公民館長を要に組織化されています。その中で表に出ようと、声かけ運動をしてもらっているんです」

おせっかい。古き佳き言葉が、再び胸に浮かぶ。館山の二面性でいうと、田舎であることが功を奏しているのだろう。人気の高いダンスサークルをはじめ、積極的に参加する人は多いという。

**あばらが足りない
おおらかな人の気質**

もっとも印象深かったのは、館山の人の気質だ。

「『あばらが一本足りない』とよく言われるんです。温暖な気候で、人はおおらかに育つ。海も山も恵みが豊富だから、細かいことを気にしないよ」

生活が厳しくない分、辛抱心がない、我慢が足りないなど、ときにはネガティブにも解釈されるが、金丸市長によると、あばらの由来は江戸時代に遡るそう。

で運ぶ際、なるべく船の先端を細くして抵抗を少なくし、あばらと呼ばれる肋骨にあたる部分を抜いていったんですよ」

あばらを抜くと強度は弱まる上、バランスを取るのが難しくなるが、船のスピードは上がる。

「江戸の食生活を担っていたんですね。里見水軍の流れをくむ操縦技術があったからなんですよ」

東京湾をまっすぐに進んで江戸を目指す、勇壮な漁師の姿が脳裏をよぎる。

と同時に、館山の人は柔軟性がありつつも、いったん決まったらがんがん直進するという、八代氏の話も思い出された。これまで聞いてきた館山市の様子は、「あばら

が一本足りない」気質があつてこそだと、微笑ましく思う。

八代氏は、「まあいいっぺよ」というのが、このあたりの人の口ぐせだとも。方言の軽やかな響きとも相まったのか、ふっと肩の力が抜けた。白黒はつきりした態度が問われがちな時代において、じんわりやさしくしみる言葉だ。

自分の意志で動ける都市であり、温もりを覚えるおせっかいが残る田舎であり。幸せの選択肢が許される暮らしは、海のごとき深く広い館山の人の心の象徴のような気がした。



春の桜やツツジ、夏のハマヒルガオ、秋のコスモス、冬に咲き始めるポピーやストックと、館山市はいたるところでほぼ一年中、花を愛でられる「花の王国」だ。

守
破
創
対談

豪雪地帯である越後妻有^{つまり}地域（新潟県十日町市、津南町）で3年ごとに開催され、国内外から約50万人が来場する「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」。その総合ディレクターを務める北川フラム氏との対談から、同芸術祭が成功に至った理由と、これからの地域再生における美術の役割を考える。



日本銀行政策委員会 審議委員

原田 泰

Yutaka Harada

1950年東京都生まれ。74年東京大学農学部卒業後、経済企画庁入庁。国民生活局国民生活調査課長、調査局海外調査課長、大蔵省財政金融研究所（財務省財務総合政策研究所）次長、(株)大和総研専務理事チーフエコノミスト、早稲田大学政治経済学術院教授などを経て、2015年3月より現職。著書に『日本国の原則』（石橋湛山賞）、『昭和恐慌の研究』（共著、日経・経済図書文化賞）、『ベーシック・インカム』等多数。



アートディレクター

北川フラム

Fram Kitagawa

1946年新潟県生まれ。東京藝術大学卒業。数々の美術展をプロデュースするほか、地域再生として「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」「瀬戸内国際芸術祭」などを手がける。2003年フランス共和国政府より芸術文化勲章シュヴァリエを受勲。06年度芸術選奨文部科学大臣賞（芸術振興部門）、07年度国際交流奨励賞・文化芸術交流賞受賞。12年オーストラリア名誉勲章・オフィサー受賞。

「芸術祭」が創られる
美術家と地域住民が共鳴して

美術とは、「どうしても出してしまうざるを得ないもの」である

原田 二〇〇〇年に始まった「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」は、昨年二〇一五年に第六回を迎え、世界から注目を集める芸術祭に成長しました。最初から大きなお話になりますけれども、北川さんにとって、そのように国境を越えて人々を惹き付ける「美術」とは何でしょうか。

北川 「美術」とは、物を食べた、あるいは排泄したりすることを含めた「人間の生理」だと思っています。近代化によって忘れ去られてしまった昔の記憶や、あるいは少数派の人の気持ち、未来への不安……そういった極めて生理的な「出してしまうざるを得ない」もの。「こうすればいい」「こうであるべき」ではなくて、「こうするしかどうしようもない」という、自然のあらわれだと考えています。

原田 「大地の芸術祭」において、それを最も顕著に象徴している作品は何でしょうか。

北川 いろいろありますが、たとえばクリスチャン・ボルタンス



クリスチャン・ボルタンスキー+ジャン・カルマン
「最後の教室」 photo:Hironao Kuratani
昭和30年代には数百人もの在校生で活気にあふれていた旧東川小学校校舎内の教室、廊下、体育館を使って複数の作品が展開されています。実際は写真よりも暗く、目が慣れるにつれ、うっすらと写真の風景が見えます。

キーとジャン・カルマン（フランス）による「最後の教室」。これは、廃校にわらを敷いたり、古い扇風機を置いたり裸電球を吊るしたり、そのぐらいいのこしにかけていないようですが、昔の記憶がズキンと迫ってくる感じがしますね。失われたものが実は重要だったということを感じられるものがあります。

原田 私もその作品を見たとき「昔、そこに子どもたちがいた」ことを感じました。直接子どもを思い起こさせるものはないのに、裸電球でそれを表現するのは驚き

でした。

北川 アーティストにとっては具体的なものよりも、そういったもののほうが、自分の中にある気持ち、気分をあらわされると思っただけでしょう。

「そこ」でしか表現できないものがある

原田 ご著書『ひらく美術』（ちくま新書）の中で、ご自身の美術に対する出発点が、奈良の仏像だったと述べられていることが印象的でした。仏像は、「土地、寺院に至る道、伽藍、内陣と連なり、かつそれらに含まれるサイトスペースフィック（場所・環境の特異さ）な作品」と感じられたと書かれていますね。越後妻有のあちこちに設置された美術群もそのようなものだと思います。

北川 仏像は、仏像だけ取り出しでもそれなりに迫力があります。どこか伝わってこないところがあります。その空間、お堂だけでなく伽藍全体、もっと言えば寺院に行く道を含めた空間体験の中です。そういうことを「大地の芸術祭」でも実現しなかった。

原田 「大地の芸術祭」は、バスで崖から落ちそうな細い道を行って、車道がなくなつた先をしばらく歩いて……という体験が全て美術だと思いました。

北川 そうなんです。そんな山奥での農業は効率が悪く、その地域そのものがなくなろうとしていました。そこで少しでも活力になれば、ということプロジェクトをスタートさせたのですが、山を下ると川があり扇状地になって学校がある……あの地域へ通っているうちに、祖霊や山の神がおりてくるような、そうであってほしいと願うような気持ちになりました。

フランスの市民革命以来、美術は王侯貴族のものからブルジョワジーを含めた一般市民のものになりました。二〇世紀、民主主義、機会均等の時代になると、美術は自己を実現するものとされるようになりまし。美術館の白い壁の中は、ヨハネスブルグでも東京でも同じように作品を見せることができます。しかし、その創られた空間の中には、その土地の祖霊や生活、歴史はすべて消えてしまっています。

いやが応でも社会との「ずれ」のようなものは生理として出てくるけれども、それを表現することは自己実現ではなく、自然と向き合い、人とつながり、そこで長い間続いてきた生活や先祖の記憶をことごとくであってほしいと僕は思うんです。

原田 昔の美術は宗教共同体のために創っていたと思うんですが、特に一九世紀以降、自分を表現するために創られるようになり、そして再び、自分の表現であり、かつ共同体の表現である作品が求められているということですね。

北川 そうですね。二〇世紀以降、都市生活が中心になると、都市の欠陥や病が表現されるようになってきてしまった。いわゆる現代美術の最先端は、都市の病のカルテのように僕は感じるんですね。それは本当に寂しい。もともと違う美術の働き方があるんじゃないか、世界と交歓していくことができるのではないかと考えたときに、それは捨てられていく田舎でこそできるのではないかと思いました。「大地の芸術祭」で五〇万人、瀬戸内海の島々を舞台に開催されている「瀬戸内国際芸術祭」（北



川氏が総合ディレクターを務める)で一〇〇万人の人が訪れますが、この数は、現代美術のファンの数よりもはるかに多い。都市の人が、都市の限界を無意識に感じて、自分と関わるこののできる田舎を探しているから、これだけの人が集まるのではないかと思っています。

原田 里山での芸術祭が、地域おこしとして成功した理由のひとつに、「都市の人々が求めていたから」ということがあるんですね。

北川 もう一つ、アーティストがその地域の資源や特色を明らかにしようと働きたことも大きかった。先ほど言ったような「自己実現」だけではうまくいかなかったと思うんです。都市の美術館やギャラリーの「ホワイトキューブ——何もない空っぽの空間——」の中では「この作品がいかに目立つか」ということを考えるけれども、山の中、田んぼの中では、「作品の後ろに広がる風景をいかに見せるか」。たとえば、イリヤ&エミリア・カバコフ(ロシア)の「棚田」は、農作業をする人々の姿をかたどった彫刻や稲作の情景を詠んだ文章のフレームが配置され、豪雪地帯で田んぼを営む人々の生活を見せるための仕掛けになっています。

原田 自分を見せることに疲れていた美術家たちにとって、その土地の記憶を見ることが新鮮だったのかもしれない。

北川 まったくその通りです。「いかに先鋭的か」ということを見えない敵に向かって描くのと違い、地元暮らしを見せる美術を作るのと、地元のじいちゃん、ばあちゃん元気になる。おにぎりをくれ

たり、「ほら、元気出せ」とお尻を叩いてくれたりするわけです。それが創る喜びになっている。アーティスト自身、あそこへ行っただけで変わってしまったと思えず、作品に関わった人の喜び、誇りは、見る人に絶対伝わりますから、見る人も楽しい。そういうことで人を呼び込んだ気がします。

原田 地元の人と美術家が共鳴していたんですね。

北川 現代美術に対して、どこか「エキセントリックであればいい」としていることに違和感がありましたが、でも美術は人間のものなのだから、もっとヒューマンであってほしい。人がいなくなり捨てられていく地域のじいちゃん、ばあちゃんに元気を与えるような美術が実現できなければ美術をやめようと、僕はひそかに決意していたんです。

反対者も巻き込んだことが成功の鍵となった

原田 約二〇年前にプロジェクトが動き出した当初は、市町村の足並みが揃わず、反対する人も多かったそうですね。

北川 当時、美術による地域おこ

しなんて前例がないのでなかなか理解されず、二千回以上、説明会を開きました。最終的には「そんなに言うなら仕方ない」というお情けみないなもので実現にこぎ着けたのですが、結果として地元の方も楽しめたので今も続いています。

原田 北川さんの「反対者が同じ土俵に乗ることの意味は大きい」「(ひらく美術)より」という言葉は、「大地の芸術祭」が成功した理由の一つではないかと思えます。無理だと言われていたことが共感を得る瞬間は素晴らしい。

北川 それは若いときの反省からきています。何か実行しようとしたときに、孤立していたり少数意見だったりすると、理解してくれない人と一緒に組み、違う立場



「うぶすなの家」 photo:Hikaru Sasaki

焼き物美術館として再生した1924年築の古民家。一階のレストランでは地元の食材を地元のお母さんたちが料理して提供しています。二階は、和紙や金箔を使った茶室が三つあります。



の人とは永遠につながることはありません。それで結局、内輪だけで粹がっってしまう。行政が関わるプロジェクトには、あらゆる人が発言する権利を持っています。それこそが重要。美術は「直接的効用はない」と反対されがちですが、直接的効用がないからこそ、いろいろな人たちが意見を言えて、同じ土俵に乗ることができるという面もあります。「こんなのは誰でも作れるわ」「わしはわからない」と、いまだに言う人も多いけれども、だからおもしろい。そう言う人たちが同じ土俵に上がって一緒に作れたらうれしいし、アーティストも心強いでしょう。今、「大

地の芸術祭」に一所懸命関わっている人のほとんどは、当初は反対したじいちゃん、ばあちゃんたちですよ。

原田 都市から美大生やボランティアスタッフなど若者もたくさん来ますから、それだけでも活気づきますね。

北川 自分の親の言うことなんか聞かなそう連中が、よその土地のじいちゃん、ばあちゃんの話はちゃんと聞くところがおもしろいですよね。二〇一五年は、オープン前に約二〇〇人近い外国人のサポーターが来て、長い人は一カ月以上、短い人でも一週間ほど滞在し、制作を手伝っていました。国籍を問わず、みんなおもしろがっているプロジェクトには加わりた

原田 アジア、特に中国は典型だと思いますけれども——もちろん日本もですが——、どんどん地方が衰退しています。「大地の芸術祭」に何かヒントがあると思って来ているのかもしれない。

北川 そういう部分もあります。アジアだけでなく欧米も田舎は相当厳しくなっていますから、そういう感覚はつながっているんだろ

うと思います。

原田 美術による「地方創生」について、北川さんは、単に瞬間的に目立って消費されるイベントではいけないとしながらも、可能性を見ておられるように思います。

北川 美術は地域の資源を発見することができずし、土地を使うための交渉、説得の過程で、地元の人たちの心が開かれていきます。そういう力が美術にはあります。

原田 となると、プレゼンテーションのうまい美術家が必要になりますね。

北川 そうであればいいのですが、実際は不得手な人が多いですね。今の社会的な価値観でいうと、プレゼン能力や情報処理能力がある人が強いでしょう。それはそれでいいのですが、それ以外にもいろいろ能力がありますから。それらも評価してほしいものです。

原田 だからこそ、北川さんのようなプロデューサーする人が必要なのではないですか。最後に、著書に「資本主義は効率一辺倒」「人を画一化させる」という主旨のことが書かれていたのですが、私はエコノミストとして、資本主義は逆に一

人一人を自由にし、個性を生かすことができると思うのですが、いかがでしょうか。

北川 そうですね。元気のいいIT企業が「大地の芸術祭」を手伝っていますから、資本主義自体が悪いわけではないのは確かですね。ただ、格差社会がここまで進行してしまったことに危機感があるのと、効率化の中で身体を動かす労働の価値が低くなっている点を危惧しています。美術を語らなければならぬ本なのに、僕はついそういうことに口を滑らせてしまうんですよ（笑）。

原田 それは世の中に対していろいろな思いがいろいろだからこそだと思います。本日は興味深いお話をありがとうございました。



内海昭子「たくさんの失われた窓のために」 photo:Hironao Kuratani
世界に開かれた大きな窓に風がそよぐと、美しい里山の風景を違った目で見ることができます。



貨幣の世界

1

世界にはいろいろな国があり、その国ごとに貨幣があります。「貨幣の世界」では、さまざまな貨幣について、形やデザイン等に注目してご紹介します。第一回は古代から近世にかけてのオリエントからヨーロッパの貨幣の「形」についてご紹介します。

形 その1 古代オリエントから欧州

始まりの貨幣の形

そもそも貨幣はいつ頃からあったのだろうか？ という疑問は、「貨幣」とは何だろうか？ という疑問と同じように答えるのが難しいものです。

今から数千年前の古代メソポタミア（今のイラクあたり）の遺跡から出土した粘土板の中には、「この粘土板を持ち込んだ者には、しかるべき量の麦（ワイン、銀等）を渡す」といった為替手形のようなものが多数残されているそうです。私たちが普段手にする紙幣（「紙の貨幣」）は、中国・北宋時代（九六〇）

（一一二六年）の為替手形から発展したものとされていますので、この粘土板は初期の貨幣みたいなものともいえます。

また、メソポタミアを含む古代オリエント地域から地中海沿岸地域では、銀が秤量貨幣（重さが価値を示し、切り分けて使える貨幣）として取り扱われていました。それらの形は、「コイル」や「輪」の形をしていました（写真1）。

では、私たちが普段頭に浮かべるような金属の「貨幣」がこの地域の歴史に登場したのはいつかという点、紀元前七世紀頃、現在のトルコのアナトリア地域にあったリュディア（リディア）王国での

写真1 古代メソポタミアのコイル型の秤量銀貨



紀元前 2000 ~ 1600 年頃、イラク・ハファジェ出土（直径 4.7 cm、長さ 22.3 cm）
シカゴ大学オリエント研究所蔵品（Courtesy of the Oriental Institute of the University of Chicago.）

写真3 紀元前5世紀中頃発行の古代アテネのテトラドラクマ銀貨



古代ギリシャの都市国家アテネの守護神であり、知恵・学問そして戦の女神アテナの横顔が使われています。また、都市アテネの守護神の座を海神ポセイドンと争った際に、女神から市民への贈り物とされた平和の象徴であるオリーブ、女神の象徴であるフクロウがデザインに使われています。このフクロウは、近代から現代にかけてのギリシャ国家で何回か採用されました（重量約17g）。

(© The Trustees of the British Museum)

写真2 リュディア王国（紀元前7～6世紀）のエクレトロン金貨



貨幣の価値の象徴としてライオンの頭が刻印されています。これよりサイズが小さくなるにつれ、価値の象徴としてのライオンの体もより小さい部分が使われ、一番小さい物には、ライオンの足1本が刻印されているそうです（11×13mm）。（提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館）

ギリシャ王国で1912年に発行された10レプタニッケル貨（直径21mm）



ギリシャ共和国で1973年に発行された1ドラクマニッケル黄銅貨（直径21mm）



現在ギリシャ共和国で使用されている1ユーロパイメタル貨（2006年発行のもの。センター：白銅、リング：ニッケル黄銅、直径約23mm）



（いずれも個人蔵）

ことでした（写真2）。「歴史の父」とも呼ばれる紀元前五世紀頃の古代ギリシャの歴史家ヘロドトスはその著書、『歴史』（松平千秋訳、岩波書店）において、「リュディア人はわれわれの知る限りでは、金銀の貨幣を鑄造して使用した最初の民族」との旨を述べています。

このリュディアの貨幣は、当初、エレクトロンという金と銀の自然合金でつくられていました（その後、金貨と銀貨が分けてつくられるようになりました）。ヘロドトスの記述と異なり、実はリュディアの貨幣は、鑄型に金属を流してつくる「鑄造」ではなく金属の塊に「打刻」

したものです。その形は、現在私たちの思い浮かべる薄い円盤に打刻したものはかなり異なり、いびつな楕円形や豆のように立体的な形をしています。

主流は少しいびつな円形

リュディアが発明した「貨幣」は、その便利さ故に、古代ギリシャ・オリエント地域に瞬く間に広まりました。その中でも、優良な銀山を持ち、交易やデロス同盟諸都市からの上納金で栄えた都市国家アテネが発行した「テトラドラクマ（四ドラクマ）銀貨」（写真3）は、アテネの国力を反映して、当時の国際貨幣として

地中海世界全体に通用しました。古代アテネの銀貨をはじめとした少々いびつながらも丸い金属板に打刻する貨幣は、その後、古代ローマ帝国や中近東の各国を経て、現在に至るまで標準的な形として伝わりました（写真4）。

写真 4-2 古代ローマ帝国ソリドゥス金貨
(紀元 324 年頃発行)



肖像は、ローマ帝国中興の祖と言われるコンスタンチヌス一世（在位 324～337 年）です（直径 19mm）。
(提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館)

写真 4-1 古代共和制ローマ デナリウス銀貨
(紀元前 137 年前後発行)



ローマを建国したとされる双子のロムルスとレムスにオオカミが乳を与えているという神話に基づく図柄とみられます。なお、この時代のローマの貨幣には、造幣責任者の名が刻まれています。写真の貨幣の右側にも、責任者 Sextus Pompeius の名を略した SEX PO という文字が刻まれています（直径 19mm）。
(提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館)

写真 5 スウェーデンの銅板貨幣（1716 年発行）



スウェーデンは金や銀がそれほど産出しない一方、銅が豊富なことから、金・銀の表示の額面と等しい価値を持つ重量の銅板貨幣を発行しました。なお、18 世紀のロシアもスウェーデンをまねた銅板貨幣を発行しています。額面は 2DALER（重量約 1.3kg、約 21 × 18cm）。
(提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館)

貨幣は何故つくられた？

秤量貨幣から重さが一定の定位貨幣が生まだされた背景について、リュディアに貨幣が登場してから200年ほどたった頃、古代ギリシャ最大の哲学者の一人アリストテレス（紀元前384～322年）が、著書『政治学』（山本光雄訳、岩波書店）で、言及しています。

アリストテレスいわく、物々交換の経済から国家間の貿易へと経済が発展する中、それ自体価値のある銀や鉄が秤量貨幣として登場したとしたり、
「こうしたものの価値は初めのうちは単に大きさと重さによって秤られたが、しかし遂には秤る面倒を省くために、また刻印がそのうえに押されるに到った。何故なら刻印は『どれだけか』の印として押されたから」と述べています。本文中にも引用したヘロドトスの『歴史』によれば、リュディアは、小売制度を始めた国でしたので、商売に便利ようにしたということです。

黄金からお金へ

最初の貨幣の原材料となったエレクトロンは、リュディアに流れるパクトーロス川で産出されたとされます。古代から、この川は砂金をはじめ鉱物資源が豊かな川として知られていましたが、それもそのはず、この川は伝説のミダス王に由来する川なのです。ミダス王は、神から触れるものすべてを「黄金」に変える能力を授かったのですが、食べ物や娘まで「黄金」になるので困ってしまい、その能力を消すために水浴したのがパクトーロス川だったのです。逆に、リュディアの王たちは、その川から、触れるもののほとんどすべてを手に入られる「お金」を手に入れたというわけです。

もっとも、中には、スウェーデンの貨幣のように、大きな銅板に額面を打刻したもの（写真5）や、中世から近世にかけての神聖ローマ帝国内の領邦国家や帝国自由都市の発行する貨幣には、四角形等丸くないものもありました（写真6）。ちなみにスウェーデンの銅板貨幣は、あまりに重くて不便なため、一六六一年、ストックホルム銀行はその代用として紙幣を発行しました。これが、世界最初の「銀行券」とされています（写真7）。

写真6 1/4ダカット金貨



神聖ローマ帝国の帝国自由都市ニュルンベルクの貿易用金貨です。欧州における貨幣は円形が主ですが、このように非円形の貨幣も発行されていました。なお、ダカット（英Ducat、独Dakat）は、東方貿易で栄えたヴェネチア共和国が発行し、品質が良いことで知られたデューカート（伊Ducato）金貨に範をとって、欧州各国で貿易決済用に発行された貨幣の総称です（重量0.88g、縦、横とも約11mm）。（個人蔵）

写真7 世界初の「銀行券」



紙幣には小さくDal.10（10^{ダール}DÄLER）と書かれています。また、今の紙幣にはない発行日付（1666年5月）が入っています（153×187mm）。（提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館）

ドルの起源

22 ページのスウェーデンの巨大な銅板貨幣の貨幣単位が「ダーレル (Daler)」だと聞いて、米国の「ドル・ダラー (Dollar)」に音が何となく似ているなあと思われた方もいらっしゃるでしょう。実は、この二つの貨幣単位は、いずれも神聖ローマ帝国の領邦国家等で発行された「ターラー (Thaler)」銀貨に由来していると言われています。

15 世紀終わり頃から 16 世紀初頭にかけて、現在のドイツとチェコの国境地帯の山々で大規模な銀山がいくつか発見されました。その中に他の銀山を圧するほどの巨大な「聖ヨアヒムスタール (Joachimsthal)」銀山がありました。「聖ヨアヒムスタール」とは「聖ヨハネの谷」という意味です。現在のドイツ語では「谷」は Tal と綴りますが、昔は Thal と綴りました。同銀山のあった場所は、現在、チェコのヤーヒモフ < Jáchymov > という町です。

聖ヨアヒムスタール銀山は 1512 年に発見され、マルティン・ルター (1483 ~ 1546 年) による宗教改革開始から 2 年後の 1519 年より、重量約 30 g、直径約 4cm の銀貨「ヨアヒムスターレル」あるいは略されて「ターレル」と称される高品位の銀貨が製造されました (写真 A)。この「ターレル」銀貨は、欧州内を流通しましたが、神聖ローマ帝国の各領邦や欧州各国はこれを規範としたターレル銀貨 (写真 B) や、より大きい 2 ターレルあるいはより小さい

単位の 1/48 ターレル等、様々な額面の貨幣を発行しました。ちなみに、オランダではダールデル (Daalder) (写真 C)、スウェーデンでは上記のとおりダーレル (Daler) と称されました。

16 世紀 ~ 17 世紀、通商で栄え欧州の覇権国家となったオランダは、現在のアメリカ合衆国東海岸あたりに植民し、ニューアムステルダムを建設しました。このオランダ領北米植民地では、オランダ版ターレル銀貨であるダールデル銀貨が流通していたそうです。

17 世紀後半、第二次英蘭戦争 (1665 ~ 67) の結果、ダールデルが流通していたニューアムステルダムを含む北米オランダ植民地は、英国領となりました (ニューアムステルダムは、その際ニューヨークに改称されました)。この間、南米のポトシ銀山をはじめとした莫大な富を植民地から得たスペインは、本国スペイン、植民地のポトシやメキシコ等でターレル銀貨に相当する 8 レアル銀貨 (写真 D) を製造し、欧州、南北アメリカで「スペインドル」として流通しました。

スペインドルが流通していた英領北米 13 州は、1776 年に英国より独立しアメリカ合衆国となり、同国は、スペインドルを踏まえてドル (Dollar) を通貨単位として採用しました。なお、スペインドルは、19 世紀前半まで米国では法定通貨だったそうです。

写真 A ポヘミア
ヨアヒムスターレル銀貨
(1526 年発行)



製造が開始されてから間もない頃のターレル銀貨です。

写真 B 神聖ローマ帝国
ザルツブルク大司教領ターレル
銀貨 (1620 年発行)



作曲家モーツァルトの生誕地として知られるザルツブルクは、ドイツ語で「塩の城砦」という意味で、岩塩採掘で栄えた町です。現在は、オーストリアの一都市ですが、1803 年までカトリックの大司教によって治められる神聖ローマ帝国内の領邦国家の一つでした。貨幣のデザインにも大司教が描かれています。

(提供：日本銀行金融研究所貨幣博物館)

写真 C オランダ
ダールデル銀貨 (1609 年発行)



オランダは、毛織物と通商で繁栄していたスペイン領ネーデルラント北部 7 州が、スペインとの 80 年に及ぶ独立戦争 (1568 ~ 1648 年) の結果、成立した国家です (現在のオランダは王国ですが、当初は「連邦共和国」でした)。

写真 D スペイン (メキシコ製)
8 レアル銀貨 (1761 年発行)



アメリカ独立戦争の直前の頃の物です。ドルマーク (\$) は、確かな起源は不明ですが、この銀貨の表面にデザインされている「ヘラクレスの柱」(ジブラルタル海峡の両岸に対峙する岩山) を象徴した 2 本の柱、あるいは柱と巻き付いているリボンからデザインされたといわれています。

造幣局長官ニュートン

産業革命の発祥国である英国では、1660年代に貨幣の製造方法が手打ちから機械に切り替えられました。しかし、その後も、依然として手打ち式で作られていたエリザベス一世女王時代（1558～1603年）の貨幣が流通しており、偽造貨幣や貨幣の切り取りがまかり通っていました。そこで、過去の手打ちの貨幣を回収し、一気に機械製造による貨幣に切り替えるプロジェクトが企画されましたが、遅々として進みませんでした。そこに登場したのが、「万有引力」の発見や数学の微積分の創始者の一人である科学者アイザック・ニュートン（1642～1727年）でした。

ニュートンは、1696年に造幣局の監事（後に長官）に就任すると、貨幣の製造現場に自ら足を踏み入れ、本職だった科学研究に負けず劣らずの熱心さで観察・調査しました。その結果に基づき、作業員が安全かつ効率的に操業できる体制を構築し、あわせて設備の大規模な更新を実施しました。そして、大規模プロジェクトは短期間で成功裏のうちに終了しました。

ちなみに、ニュートンは、造幣局に権限があった貨幣偽造の犯罪捜査にも熱心に取り組んでいました。被疑者の取り調べを自ら行うだけでなく、犯罪関係者と接触したり、贖金づくりをやっていた職人を自費で雇って犯罪組織や刑務所に潜入スパイとして送り込み、贖金づくりのボスを摘発するなど、こちらの方面でも成果をあげました。

写真8-1 手打ち式／エリザベス一世女王(在位 1558～1603年)
1 シリング銀貨 (1561～1566年発行)



(© The Trustees of the British Museum)

写真8-2 機械式／エリザベス二世女王(在位 1952年～現在)
1 シリング白銅貨 (1970年発行)



(個人蔵)

英国は1ポンド=100ペンスという貨幣単位を1970年より採用し、現在、シリングという単位は存在しません。10進法の貨幣単位を採用する以前は、下記のような複雑な貨幣単位を使用していました

- 4 ファージング= 1 ペニー（複数形は「ペンス」）
- 12 ペンス= 1 シリング
- 2 シリング= 1 フローリン
- 5 シリング= 1 クラウン
- 20 シリング= 1 ポンド
- 21 シリング= 1 ギニー

より安く、より大量に、
そしてより均一に

中世を経て近代になると、欧州の打刻貨幣の製造現場では大きな変革が起きていました。それは、機械の導入です。

一六世紀終わり頃から貨幣の製造現場に機械が導入され、それまでの職人による手打ちから機械による製造へ移行しました（写真8）。さらに当初は人力、馬、水力を使用していましたが、最終的に蒸気機関が用いられるようになりました。

移行の背景には、機械式のほうがより安く、速く、大量の貨幣を生産できることもありました。より均一の形・デザインに製造されることで偽造が難しくなるほか、均一できれいな円形の方が、貨幣の縁を切り取って地金として利用することも困難になる（見た目で分かりやすい）という理由もありました。

今回は、古代から近世にかけての東洋の貨幣の形についてご紹介します。

前橋支店を訪ねて

多岐にわたる支店の仕事

「金融政策決定会合」や「短観」といったニュースと共に映し出される東京の本店。この建物が多くの人が持つ日本銀行のイメージかもしれません。

しかし、日本銀行には、全国に三三〇の支店があること、それぞれの支店は、お金の流通・管理、銀行や官庁との取引、産業調査などさまざまな仕事を担っていることをご存じでしょうか？ 今回は、日本銀行の支店の仕事について、群馬県を管轄する前橋支店の方々のお話を交えながら、ご紹介します。

支店設置の背景

各地にある日本銀行の支店は、日本全国津々浦々に現金を供給することを第一義に設置されました。

前橋支店設置の背景について前橋支店の山支店長は語ります。

「第二次世界大戦末期の昭和十九年（一九四四年）、日に日に空襲が激しくなる中、時の渋澤総裁が、本店が空襲された場合、関東地方には資金を供給できるような支店がないことや、利根川の橋梁が爆撃されたら、北関東が金融面で孤立してしまうことを懸念して、北関東地方の金融の拠点であった前橋に支店開設を決めました。前橋支店は、日本銀行の現存する支店としては二四番目に開設されてから、今年で七三年目となります。この

間、群馬県民の皆様を支えられてきたことを、日々仕事の中で、五〇名弱の支店職員は感じています」

各地にある日本銀行の支店には、その規模に応じて、三つまたは四つの課があります。四課制を取る支店には、営業課、業務課、発券課、文書課の四つの課があります。また、三課制を取る支店では、営業課と文書課とをあわせて総務課としており、前橋支店もその一つです。ここでは、それぞれの課の仕事を紹介しましょう。

発券課の仕事

最初に、支店設置は、日本全国津々浦々に現金を供給することを目的としていると記しました。その発券課の仕事について、前橋支店の梶山剛史ただしさんに伺いました。

「日本銀行が発行するお札きょう（日本銀行券）と政府が発行する硬貨（貨幣）は、本行の窓口から取引先金融機関を通じて市中に供給されます。発券課の仕事は、金融機関との間で現金の受け渡しをする仕事ですので、経済にとって血液ともいえるべきお金を各地にうまく行き渡らせるといふ役割を強く感じています。毎日の受け渡しを行っているお金の量は極めて多額であり、事前に取引先金融機関と話し合うことで正確かつ効率的に事務を執行っています」

民間の金融機関とは異なる仕事を、日本銀行各支店では行っています。発券課の吉田加

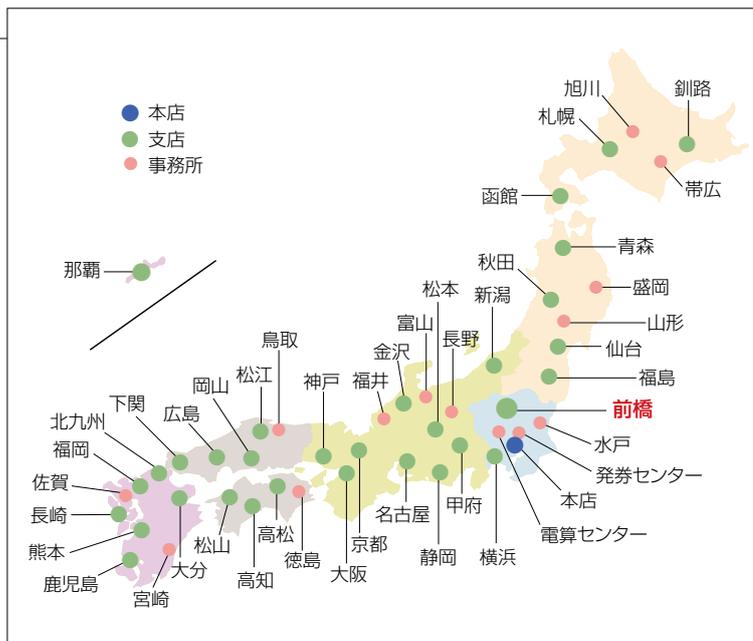


虫に食べられたお札

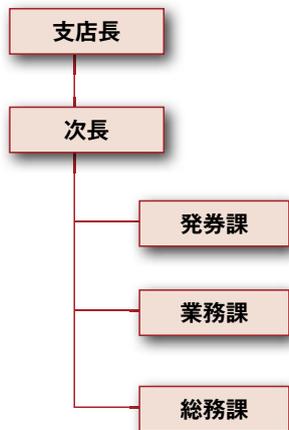


貨幣枰に並べられた汚れた貨幣

■支店などの所在地



■前橋支店の組織



代子さんが語ります。

「大きく、導く仕事は、『鑑査』事務です。これは、金融機関から受け取ったお札が本物かどうか、あるいは傷み具合などを調べて、使えるお札を再び世の中に流通させ、傷みの激

しいものは裁断処分します。この『鑑査』事務は、基本的に自動機器を使いますが、傷みがひどいものについては、一枚一枚手作業で行います」

また、損傷したお金を新しいお金に引き換える事務も発券課の重要な仕事です。梶山さんによると、平成二十六年年度、前橋支店は、本店、大阪支店、名古屋支店について「引換」件数が多かった支店とのこと。前橋支店の管轄地域は群馬県ですが、近隣の栃木県や埼玉県北部の方々からの引換の依頼、特に自動車等の解体工場から損傷した硬貨の持ち込みが多いそうです。

「銀行の仕事と聞くとパソコンの前に座って仕事をしているイメージを持たれる方が多いでしょう。しかし、発券課の仕事の多くは立ち仕事です。また、引換事務では、北関東には古くからの農家がまだ多く残っているためか、屋根裏等に置き忘れられて湿気で傷んだり、虫に食べられたお札が持ち込まれたりします。実は湿気で傷んだ紙幣は、塊になるだけでなく非常に臭いんです。また、解体工場から持ち込まれる硬貨も泥まみれのものが多く、それらを一枚一枚丁寧に分け、汚れを落とすとして鑑査し、引き換えるといった作業は重労働です。それでも、困っていた人が、引き換えられたきれいなお札や硬貨を受け取って喜ぶ顔を見ると、この仕事にやりがいを感じます」と吉田さんにはっこり笑います。

業務課の仕事

「日本銀行は、『発券銀行（お札を発行できる銀行）』『銀行の銀行』『政府の銀行』と言われます。業務課の仕事は、このうち、管轄地域における『銀行の銀行』と『政府の銀行』の業務を担っています」と語るのは、業務課の下田洋子さんです。

「『銀行の銀行』として、日本銀行には、銀行や信用金庫等の預金口座があります。そしてこの預金口座を通じて、銀行や信用金庫等との間で預金の支払い（現金自体の支払いは発券課が担当）や振替、貸出、国債売買の代金の支払いなどを行っています。前橋支店の業務課は、管轄地域である群馬県に本店や支店を設置している銀行や信用金庫等とこうした取引をしています」

これらの取引は「日本銀行金融ネットワークシステム（通称、「日銀ネット）」というオンラインシステムを通じて行われています。さらに、「政府の銀行」として日本銀行には、国の預金口座もあります。各支店の地域の方が所得税をはじめとする国税や国民年金保険料などを納付するときには、金融機関から、日本銀行各支店の業務課を経由して、国の預金口座へ入金されます。一方、国の指示で公共事業費や年金等を支払うときには、逆に国の預金口座から支払って、業務課を経由して、

「日銀ネット」を操作する様子



国民の皆さんの金融機関口座に入金します。こうした事務を、「計査・送金」事務と日本銀行では称しています。その事務を担う廣瀬良子^{りょうこ}さんによると、「業務課の仕事は電子化が進んでいることもあり、発券課の引換事務のような個人の方との接点はほとんどありません。その中で、国へ納付する交通違反の反則金は、日本銀行本支店の窓口で直接納付することができるので、時々、業務課の窓口へ個人の方が来店されることもあります。ただ、交通違反を犯さないに越したことはありませんね」

業務課は、管轄地域の民間企業、個人および金融機関と国との間のお金の流れを仲介しています。下田さんによると、前橋支店の業務課では、税務署と金融機関との間の意思疎通の仲介もしているそうです。

「日頃のやりとりは日本銀行が間に入っていますので、多分、金融機関さんと税務署さんとの直接的な関わりはそう多くないと思います」

れます。一方、税務署さんは、事務の効率化のため、税金の電子納付（ペイジー）を促進したいと考えています。そこで、『政府の銀行』として両者の中間に立つ前橋支店では、担当者間の意思疎通を円滑にできるような会合を折に触れて主催し、国庫事務の効率化を図ろうとしています。両者からとても役に立つ会合だったと感謝されています」

総務課の仕事

総務課の仕事は、大きく分けて、①支店が統轄する地域の金融経済の動向について、調査・分析を行う仕事（四課制の支店では営業課の仕事）と、②支店で働く人たちがスムーズに仕事ができるようにサポートする仕事（四課制の支店では文書課の仕事）の二つがあります。

まず、金融経済の調査・分析の仕事について、総務課で金融機関のモニタリング（活動状況の把握）を取りまとめている、銀行に入って六年目の坂田賢太^{けんた}さんに伺いました。

「様々な経済活動に必要なお金が、金融機関や企業、そして個人の間で円滑に流れるには、金融機関の経営が安定していることが必要です。群馬県内に本店を構える二つの銀行と七つの信用金庫の経営実態、業務等のリスク管理の状況などを、金融機関へのヒアリングや統計資料の分析などを通じて把握し、支

店長に報告することが私を含めた金融機関のモニタリングを担当する三名の仕事です。また、必要に応じて金融機関への助言もしています」

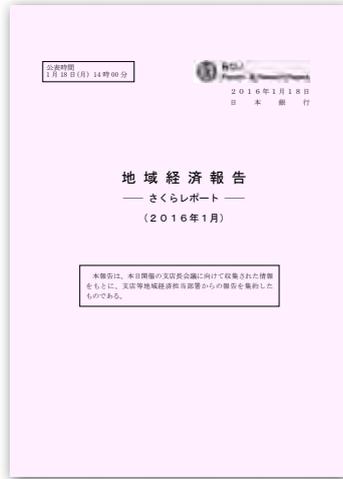
「金融機関の方が経営状態をきちんと話をしてくれるのだろうかといった疑問を持たれるかも知れませんが、金融機関の方々は、問い合わせに真摯に対応していただき、とても感謝しています」

県内の経済活動の状況調査については、日本銀行に入って二年目の総務課の尾崎達哉^{たつや}さんが語ります。

「支店の経済・産業調査は四名で行っており、私の担当は製造業、特に輸送用機械、化学、電気機械の三業種です。調査に際しては、統計分析も行いますが、統計はあくまで過去の数字です。現在、ましてや将来の見通しに

Bank of Japan Maebashi Branch	
群馬県金融経済概況 (2016年2月)	
2016年2月5日 日本銀行前橋支店 (参考) 前回発表	
【景気判断】	同左
県内景気は、緩やかな回復基調にある。	
【項目別の推移】	
個人消費 雇用・所得環境が緩やかに改善するも、総じてみれば底堅く推移している。	同左
住宅投資 持ち直しの動きが足踏みしている。	緩やかに持ち直している。
公共投資 緩やかに減少している。	同左
設備投資 緩やかに増加している。	基調としては、緩やかに増加している。
輸出 幅広い圏内の動きとなっている。	同左
生産 幅広い圏内の動きとなっている。	同左
雇用・所得 緩やかに改善している。	同左

(本件に関するお問い合わせ先)
日本銀行前橋支店 総務課 TEL 027-225-1114 FAX 027-220-1025
(ホームページアドレス)
http://www3.boj.or.jp/maebashi/



ついでには、さまざまな企業の方々から直にお話を伺うこと無くしては分かりません」

坂田さんも尾崎さんも、多くの金融機関や企業から伺ったお話の中から、日本経済全体の先行き見通しを考える上での含意をくみ取ることが、仕事上一番難しいとのことでした。こうした調査・分析の成果は、日本銀行本店への報告を通じて金融政策の遂行に役立てるとともに、毎月、各支店では「管内金融経済概況」を取りまとめ、記者会見を行うなどして公表しています。なお、日本銀行では、四半期に一度、これら支店の調査結果をとりまとめた「さくらレポート」も公表しています。

総務課のもう一つの仕事は、支店の人々がスムーズに事務を行える環境作り、つまり支店の縁の下の力持ちの仕事です。総務課での仕事を取りまとめられている高橋徹さんは、「前橋支店の総務課は、支店建物・設備の維持管理、物品の購入、各種経費の支払い、職員の福利厚生、支店の警備など非常に多岐にわたる仕事を一手に担っている部署です。例えば、

前橋支店では東日本大震災後に計画停電の対象となりましたが、その対応も総務課で担いました」と説明します。

同じく総務課の三ツ井南香さんも、「私は、支店長の日程管理を行う支店長受付をしつつ、支店の経費関係の仕事にも従事しています。総務課の職員は、専門的に『これだけ』という仕事ではなく、一人で多様な仕事を一日の中で行っています」と話します。

清水晃さんは、現金搬送作業等の各種庶務事務に従事しつつ、電気関係をはじめとした建物・設備の維持管理や、支店の警備もしています。

「建物・設備の維持管理については、設備のトラブルによって支店の業務に支障があったらならないことなので、細心の注意を払いながら点検・整備を行っています。また、警備は、防犯面での最前線として、設備の維持管理とは異なる緊張感があります。来店される方の身分証明書の確認等、水際での防犯に努めておりますが、身分証をお持ちでない場合は、支店にお入れするわけにはいかないのが忍びなく、この点は支店としてもっと広報していく必要性を感じます」

その広報も総務課の仕事です。前橋支店でその仕事を担っている松崎麻美さんに伺いました。

「前橋支店では、ホームページを使った広報のほか、平日の支店見学、夏休みの『親子

見学会」といったイベントも開催しています。

支店建物内にある広報ルームで日本銀行の業務および経済に関する解説を行ったり、鑑査等の模擬体験をしていただきます。高校からのリクエストで、支店長が『金融機関で働くことの意義』といったお話をすることもあります。広報活動は、日本銀行の業務や地域での役割を知ってもらう重要な仕事だと思いい、日々より良い広報を行うための工夫を凝らしています」

日本銀行本支店では、見学やレクチャー等を行っています。見学等をご希望の方は、お近くの日本銀行本支店のホームページでご確認のうえ、ぜひお申し込みください。お待ちしております。



前橋支店のホームページはこちらから



前橋支店ホームページ



日本銀行のレポートから

日本銀行は、1月、4月、7月および10月の政策委員会・金融政策決定会合において、先行きの経済・物価見通しや上振れ・下振れ要因を詳しく点検し、そのもとでの金融政策運営の考え方を整理した「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）を決定し、公表しています。本稿では、2016年1月の展望レポート（基本的見解は1月29日公表、背景説明を含む全文は1月30日公表）のポイントを解説します。
*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。<http://www.boj.or.jp/mopo/outlook/index.htm/>

「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）

— 二〇一六年一月 —

二〇一五～二〇一七年度の 中心的な見通し（図表1・2）

【景気】

家計、企業の両部門において所得から支出への前向きの循環メカニズムが持続するもとで、国内需要が増加基調をたどるとともに、輸出も、新興国経済が減速した状態から脱していくことなどを背景に、緩やかに増加するとみられる。このため、わが国経済は、基調として緩やかに拡大していくと考えられる。

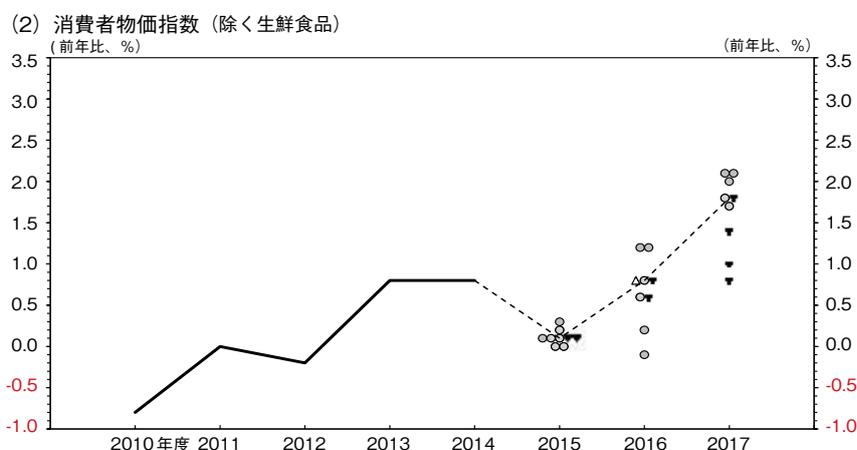
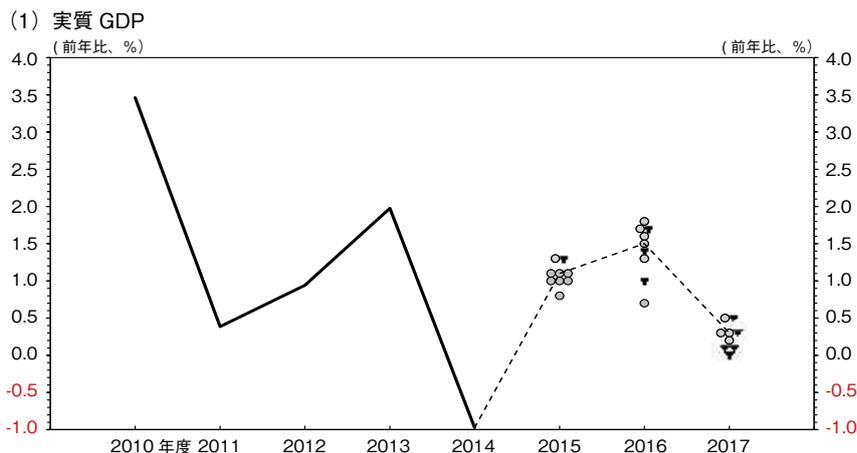
【物価】

消費者物価の前年比（消費税率引き上げの直接的な影響を除くベース）は、エネルギー価格下落の影響から、当面0%程度で推移するとみられるが、物価の基調は着実に高まり、2%に向けて上昇率を高めていくと考えられる。「物価安定の目標」である2%程度に達する時期は、原油価格が現状程度の水準から緩やかに上昇していくとの前提のもとでは、二〇一七年度前半頃になると予想される。その後は、平均的にみて、2%程度で推移すると見込まれる。

金融政策運営（図表3）

2%の「物価安定の目標」をできるだけ早期に実現するため、「マインナス金利付き量的・質的金融緩和」を導入した。日本銀行は、2%の「物価安定の目標」の実現を目指す指し、これを安定的に持続するために必要な時点まで、「マインナス金利付き量的・質的金融緩和」を継続する。今後とも、経済・物価のリスク要因を点検し、「物価安定の目標」の実現のために必要な場合には、「量」・「質」・「金利」の三つの次元で、追加的な金融緩和措置を講じる。

図表 1 政策委員の経済・物価見通しとリスク評価



(注1) 実線は実績値、点線は政策委員見通しの中央値を示す。
 (注2) ○、△、▼は、各政策委員が最も蓋然性が高いと考える見通しの数値を示すとともに、その形状で各政策委員が考えるリスクバランスを示している。○は「リスクは概ね上下にバランスしている」、△は「上振れリスクが大きい」、▼は「下振れリスクが大きい」と各政策委員が考えていることを示している。
 (注3) 消費者物価指数(除く生鮮食品)は、消費税率引き上げの直接的な影響を除いたベース。

図表 3 「マイナス金利付き量的・質的金融緩和」の導入

マイナス金利付き量的・質的金融緩和

「量」・「質」・「マイナス金利」
3つの次元で
 追加緩和可能なスキーム

日銀当座預金に
▲0.1%の
 マイナス金利を適用

大規模な長期国債買入れとあわせて
 金利全般により強い下押し圧力を加える

図表 2 政策委員見通しの中央値 (対前年度比、%)

	実質 GDP	消費者物価指数 (除く生鮮食品)	消費税率引き上げの影響を除くケース
2015年度	+ 1.1	+ 0.1	
(10月時点の見通し)	(+ 1.2)	(+ 0.1)	
2016年度	+ 1.5	+ 0.8	
(10月時点の見通し)	(+ 1.4)	(+ 1.4)	
2017年度	+ 0.3	+ 2.8	+ 1.8
(10月時点の見通し)	(+ 0.3)	(+ 3.1)	(+ 1.8)

(注1) 原油価格(ドバイ)については、1バレル35ドルを出発点に、見通し期間の終盤にかけて40ドル台後半に緩やかに上昇していくと想定している。その場合の消費者物価(除く生鮮食品)の前年比に対するエネルギー価格の寄与度は、2015年度で-0.9%ポイント程度、2016年度で-0.7~-0.8%ポイント程度と試算される。また、寄与度は、2016年度後半にマイナス幅縮小に転じ、2017年度前半中には概ねゼロになると試算される。

(注2) 今回の見通しでは、消費税率について、2017年4月に10%に引き上げられること(軽減税率については酒類と外食を除く飲食品および新聞に適用されること)を前提としているが、各政策委員は、消費税率引き上げの直接的な影響を除いた消費者物価の見通し計数を作成している。消費税率引き上げの直接的な影響を含む2017年度の消費者物価の見通しは、税率引き上げが課税品目にフル転嫁されることを前提に、物価の押し上げ寄与を機械的に計算したうえで(+1.0%ポイント)、これを政策委員の見通し計数に足し上げたものである。



日本銀行のレポートから

日本銀行では、年4回（1月、4月、7月、10月）、全国32支店の支店長などが本店に集まり、総裁以下全役員と「支店長会議」を開きます。支店長会議の場では、全国の支店長などが、経済指標の分析や企業等への面談調査等を通じて収集した情報をもとに、各地域の経済金融動向等について報告・討議します。こうした分析・情報に基づく各支店などからの報告を支店長会議にあわせて集約したものが「地域経済報告」（さくらレポート）です。全国を9地域に分け、景気情勢に関する報告を集約した「地域からみた景気情勢」と、その時々々のタイムリーなトピックを採り上げ企業等の生の声を収集・整理した「地域の視点」、全国9地域の金融経済概況、参考計表で構成されています。

*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。http://www.boj.or.jp/research/brp/rer/index.htm/

「地域経済報告」（さくらレポート）

二〇一六年一月「抜粋」

I. 地域からみた景気情勢

各地の景気情勢を前回（一五年十月）と比較すると、近畿から回復テンポが緩やかになっているとして判断を引き下げる報告があった一方で、東海からは、生産の緩やかな増加などを踏まえて判断を引き上げる報告があった。また、残り七地域では、景気の改善度合いに関する判断に変化はないとしている。

各地域からの報告をみると、八地域で、「緩やかに回復している」「回復を続けている」等、東海で、「緩やかに拡大している」として、この背景としては、輸出や

	【15/10月判断】	前回との比較	【16/1月判断】
北海道	緩やかに回復している	➡	緩やかに回復している
東北	緩やかに回復している	➡	生産面に新興国経済の減速に伴う影響などがみられるものの、緩やかな回復を続けている
北陸	回復を続けている	➡	回復を続けている
関東甲信越	輸出・生産面に新興国経済の減速に伴う影響などがみられるものの、緩やかな回復を続けている	➡	輸出・生産面に新興国経済の減速に伴う影響などがみられるものの、緩やかな回復を続けている
東海	輸出や生産に新興国経済の減速の影響などがみられるものの、設備投資が大幅に増加し、住宅投資・個人消費が持ち直していることから、着実に回復を続けている	➡	緩やかに拡大している
近畿	輸出・生産面に新興国経済の減速の影響がみられるものの、回復している	➡	輸出・生産面に新興国経済の減速の影響がみられるものの、緩やかに回復している
中国	緩やかに回復している	➡	緩やかに回復している
四国	緩やかな回復を続けている	➡	緩やかな回復を続けている
九州・沖縄	緩やかに回復している	➡	緩やかに回復している

（注）前回との比較の「➡」、「➤」、「➥」は、前回判断に比較して景気の改善度合いまたは悪化度合いが変化したことを示す（例えば、改善度合いの強まりまたは悪化度合いの弱まりは、「➡」）。なお、前回に比較し景気の改善・悪化度合いが変化しなかった場合は、「➡」となる。



生産面に新興国経済の減速に伴う影響などがみられるものの、国内需要は、設備投資が緩やかな増加基調にあり、個人消費も雇用・所得環境の着実な改善を背景に底堅く推移していることなどが挙げられている。

公共投資は、東北、関東甲信越から、「高水準ながら横ばい圏内の動きとなつている」等の報告があつた。一方、七地域（北海道、北陸、東海、近畿、中国、四国、九州・沖縄）から、「高水準ながらも、減少傾向にある」、「緩やかに減少している」等の報告があつた。

設備投資は、三地域（北海道、北陸、東海）から、「一段と増加している」、「大幅に増加している」等、五地域（関東甲信越、近畿、中国、四国、九州・沖縄）から、「緩やかに増加している」、「増加している」との報告があつたほか、東北から「堅調に推移している」との報告があつた。

この間、企業の業況感については、北海道、東海から、「改善している」

等、七地域（東北、北陸、関東甲信越、近畿、中国、四国、九州・沖縄）から、「一部にやや慎重な動きもみられるが、総じて良好な水準を維持している」等の報告があつた。

個人消費は、雇用・所得環境が着実な改善を続けていること等を背景に、北海道から、「回復している」、四地域（北陸、東海、四国、九州・沖縄）から、「緩やかに持ち直している」、「持ち直している」等の報告があつたほか、四地域（東北、関東甲信越、近畿、中国）から、「底堅く推移している」、「全体としては堅調に推移している」との報告があつた。

百貨店・スーパー販売額をみると、多くの地域から、「堅調に推移している」、「持ち直している」等の報告があつた。

乗用車販売は、「前年を下回っている」等の報告があつた一方、「概ね横ばい圏内で推移している」、「底堅く推移している」等の報告があつた。

家電販売は、「改善の動きに鈍さがみられている」との報告があつた一方、「底堅く推移している」、「持ち直している」、「緩やかに回復している」等の報告があつた。

旅行関連需要は、「弱めの動きとなつている」との報告があつた一方、「国内旅行を中心に底堅く推移している」、「全体としては堅調に推移している」等の報告があつた。この間、複数の地域から、外国人観光客が引き続き増加している等の報告があつた。

住宅投資は、東北から、「高水準で推移している」との報告があつたほか、八地域（北海道、北陸、関東甲信越、東海、近畿、中国、四国、九州・沖縄）から、「持ち直しつつある」、「持ち直している」等の報告があつた。

生産（鉱工業生産）は、新興国経済の減速に伴う影響などから、五地域（東北、関東甲信越、近畿、中国、九州・沖縄）から、「弱含んでいる」、「横ばい圏内の動きが続いている」

等の報告があつた。この間、四地域（北海道、北陸、東海、四国）から、「緩やかに持ち直している」、「高水準で推移している」、「緩やかに増加している」等の報告があつた。

主な業種別の動きをみると、輸送機械は、「持ち直してきている」、「緩やかに増加している」等の報告があつた一方、「横ばい圏内の動きとなつている」等の報告があつた。また、はん用・生産用・業務用機械、電子部品・デバイス、電気機械は、「緩やかに増加している」等の報告があつた一方、「弱含んでいる」、「横ばい圏内の動きとなつている」等の報告があつた。この間、化学は、「高水準で推移している」等の報告があつた一方、鉄鋼は、「減産を継続している」等の報告があつた。

雇用・所得動向は、多くの地域から、「改善している」等の報告があつた。雇用情勢については、多くの地域から、「労働需給は着実な改善が続いている」、「引き締まっている」等

の報告があった。雇用者所得についても、多くの地域から、「着実に改善している」、「緩やかに増加している」等の報告があった。

II. 地域の視点

「各地域における企業の雇用・賃金設定スタンス」

1. 企業の雇用・賃金設定スタンスの総括評価

各地域における企業の雇用面の状況をみると、人手不足感が一段と高まる中で、企業規模や業種を問わず、多くの先で積極的な採用活動を展開しているが、依然として必要な人材の確保が難しいとの声が数多く聞かれている。

こうした状況のもとで、賃金設定面では、正規社員に対して、人材確保の観点に加え、最近の収益の改善や同業他社の動向等を踏まえ、近年、都市部の企業を中心に、定昇や賞与増額を実施する先が増加している。

さらに、ベースアップ等により給与水準を引き上げる動きも着実に広がっており、来年度に向けて、昨春の伸び率を上回る引き上げの方針を示す先がみられる。また、派遣・パート等の非正規社員に対しても、人材の確保や最低賃金への対応を図るべく、時給を引き上げる先が広範に見受けられる。そうした一方で、地方の中小企業を中心に、給与の増額に慎重な先も依然として相応にみられており、その中にはベースアップによる給与水準の引き上げは難しいとする先が少なくない。

2. 企業の雇用スタンスと人材確保の現状

雇用面では、製造業で、新興国経済の減速に伴う影響を受け、非正規社員を削減する動きなどがごく一部に生じているが、多くの先では、業容の拡大や人手不足の解消等を図る目的で、積極的な採用スタンスを継続している。しかしながら、必要と

する人材は、一部の企業を除けば確保が難しい状況が続いており、特に労働力人口の減少が著しい地方圏では人手不足が深刻化している。

足もとの状況を雇用形態別にみると、正規社員については、多くの先で今春入社予定の新卒者の採用数を増やす方針を打ち出す中で、内定者の確保が計画未達となっている先が少なくない。即戦力と位置付ける中途採用も、企業が求める人材の獲得は困難との声が聞かれている。さらに、非正規社員についても、多くの企業で採用に注力しているが、必要な人員の手当てが進んでいない状況が続いている。また、業種別には、小売、飲食・宿泊、医療・介護、運輸等で不足感の更なる強まりを指摘する声が多く、一部には新規出店の抑制や営業時間の短縮など事業運営面で支障が生じている先がみられる。

こうした状況に対応すべく、多くの先では、人材の確保や所要人員の削減に向けて、様々な施策に引き続

き粘り強く取り組んでいる。

3. 企業の賃金設定スタンス

(1) 企業の賃金設定スタンスの現状と背景

以上の労働需給環境のもとでの企業の賃金設定スタンスをうかがうと、業種や企業規模、職種を問わず、都市部の企業を中心に、何らかの方法で給与の増額を図る動きに広がりがみられている。そうした一方で、地方の中小企業を中心に、給与の増額に慎重な姿勢を堅持している先も依然として相応にみられており、その中には、ベースアップなど定例給与の改定による給与水準の引き上げは難しいとする先が少なくない。

このようなスタンスについて、まず、正規社員への対応をみると、定例給与の水準を規定するベースアップに関しては、今春の方針は、労使交渉が本格化していない現時点では、未だ固まっていない先が大半ではあるが、そうした中で、収益の改善を見込む企業を中心に、昨春の伸

び率を上回る引き上げを示唆する先もみられる。こうした姿勢を示す理由としては、収益の改善に加え、①人材の獲得・繋留、②政府等からの要請、③同業他社の賃上げ実施への対応等も指摘されており、企業が必要に迫られる形で実施している面も見受けられる。

また、賞与に関しては、夏季は支給率を前年よりも引き上げる先が多くみられたほか、冬季も支給額を前年実績に上乘せるとした先が大企業を中心に少なくない。さらに、新興企業や中小企業では、ベースアップの考え方を採り入れていない先が多く、近年の収益改善を受け、賞与等の一時金で従業員に利益を還元する動きも相応にみられている。

この間、非正規社員に対しても、小売や飲食・宿泊など多くの業種で時給を引き上げる動きが続いている。これは、①非正規社員も、正規社員同様に人手不足が深刻化する中で、人材の確保に向けて処遇改善の必要性が高まっていること、②最低

賃金の引き上げへの対応が求められていること、が主たる要因となっている。また、こうした賃金面での対応に加え、福利厚生の実質や非正規社員の正規社員化等により人材の確保を図る動きもみられる。

(2) 定例給与の引き上げに慎重な姿勢となる理由

このように給与増額の動きは広がっているが、地方の中小企業を中心に、賞与の増額や非正規社員の時給引き上げにはある程度前向きに対応するとともに、定例給与の改定による正規社員の給与水準の引き上げに対して、慎重なスタンスを取る先が依然として少なくない。その要因としては、先行きに対する漠然とした不安を挙げる先が多く、同業他社の動きを見極めたいとする先も相応に見受けられる。さらに、こうした要因に加え、定例給与の引き上げに慎重な姿勢を崩さない根本的な要因として、主に以下の点も指摘されている。

① 低い期待成長率

中長期的な国内市場の縮小が想定される中で、事業の安定的な成長が展望し難い環境のもとでは、固定費の増加に繋がる形での給与水準の引き上げには慎重にならざるを得ないとの声が多く聞かれている。

② 現状の収益動向に対する厳しい認識

近年の収益改善は、為替差益等の一時的な要因や海外部門の寄与が大きき、国内事業自体は楽観視できない状況が続いているため、現状の利益水準を前提に国内の従業員の給与水準を引き上げることは難しいとの指摘が聞かれる。このほか、中小企業を中心に、収益は改善傾向ながら、利益水準が依然として低い状況では賃上げは困難との声も聞かれている。

③ 事業強化に向けた対応を優先

収益の改善を踏まえ、競争力の強化に向け、従業員の賃上げよりも、これまで抑制してきた設備の更新投資や新規投資、新規事業の立ち上げ、M&A等を優先しているとの声が聞

かれている。

4. 先行きの展望と課題

多くの企業では、先行きも現状の積極的な雇用スタンスを継続する方針にあるため、当面、労働需給が逼迫した状況は解消されない可能性が高い。それにも拘らず、来年度の給与増額に向けた企業の動きは、現時点では勢いを増す状況とはなっていない。こうした中で、持続的に賃上げが実施されていくためには、①生産性の向上や新技術・商品の開発等により、企業が自らの成長力を高めていくこと、②企業間の取引価格の適正化や消費者のデフレマインドの払拭等を通じ、企業が人件費等コスト増加分の製商品・サービス価格への転嫁を進め、収益体質の強化を図ること、③給与水準の引き上げと各種制度が整合的となるよう手当てされていくこと、などが必要との指摘が聞かれる。



創業支援に関する 地域ワークショップを開催

▼地域経済の新たな担い手となる創業者のチャレンジを支えていくことは、地域とともに生きる金融機関にとっては、地域の活力や取引基盤を維持していく上でも、重要な課題となっております。

▼日本銀行金融機構局金融高度化センターでは、二〇一五年六月四日に、取引先金融機関を対象にした「地域創生に向けた創業支援への取組み」と題する金融高度化セミナーを開催しました。これに続き、支店と連携し、地方公共団体や経済団体等の方々も対象に含めた「創業支援に関する地域ワークショップ」を適宜開



札幌会場で講演をする中小企業基盤整備機構北海道本部 松尾経営支援部長



札幌会場で講演をする日本政策金融公庫北海道創業支援センター 小野所長

催していくこととしました。

▼第一回は、札幌支店、釧路支店、函館支店と連携して二〇一五年十月二十六日に札幌市で開催しました。参加者数は約五〇名でした。杉本芳浩^{ひろ}札幌支店長による開会挨拶の後、是永靖夫^{しんげい}金融高度化センター企画役が「地域創生に向けた創業支援への取組み」と題して講演しました。また、松尾一久氏（中小企業基盤整備機構北海道本部経営支援部長）が道内金融機関と連携した具体的な創業支援事例等を紹介した他、小野晋^{すすむ}氏（日本政策金融公庫北海道創業支援センター所長）が道内での対応を含めた日本政策金融公庫の創業支援体制について説明しました。



神戸会場で講演をする中小企業基盤整備機構近畿本部 瀬戸口経営支援部長

▼第二回は、神戸支店と連携して十一月二十六日に神戸市で開催しました。参加者数は約五〇名でした。野原強^{たけ}神戸支店長の開会挨拶、是永企画役の講演の後、瀬戸口強^{たけ}氏（中小企業基盤整備機構近畿本部経営支援部長）が新規事業評価の着眼点や地域金融機関と連携した訪問アドバイザーの取組み等について講演しました。また、青木伸也氏（日本政策金融公庫神戸創業支援センター所長）による講演では、ビジネスプランの構築に悩む創業者に対し、積極的に支援の手を差し伸べることの重要性等が示されました。

▼第一回、第二回とも講演の後に一時間程度の意見交換を行いました

（モデレータ：山^{しん}口省藏^{しやうざう}金融高度化センター副センター長）。「創業希望者の発掘方法」「金融機関での支援が困難な場合の対応」「創業支援融資の与信判断のポイント」といった創業支援の課題に対し、参加者から先進的な取組み事例の紹介や具体的な対応策が示されました。

▼参加者からは、「他の金融機関の取組み事例を聞き参考になった」「創業支援において、公的機関や地域の支援機関との連携の必要性を改めて感じた」といった声が聞かれました。

▼こうした地域ワークショップについては、今後、一〜二カ月に一回の頻度で、全国各地にて開催していく予定です。

▼地域ワークショップの講演および



神戸会場で講演をする日本政策金融公庫神戸創業支援センター 青木所長

意見交換の要旨・資料は、日銀HPの「金融システム」↓「金融高度化センター」のコーナーをご覧ください。

鳥取事務所は開設七〇周年を迎えました

▼鳥取事務所では、昨年十月に開設七〇周年を記念し展示会を開催しました。

▼鳥取はお札とのゆかりが深く、肖像として最も長く使われた武内宿禰が昇天した地で、そこに建てられた宇倍神社は、全国の神社で初めてお札の図柄に採用されました。

▼展示会では、当地にゆかりのあるお札を展示したほか、三億円以上の



宇倍神社（鳥取市）と武内宿禰が採用された銀行券

銀行券の裁断層で造ったソファアーに座る体験なども企画したことから、マスコミにも報道され、大盛況でした。

▼詳細は、日銀HPの「日本銀行支店・事務所」↓「日本銀行鳥取事務所」↓「鳥取とにちぎん」のコーナーをご覧ください。

「第十二回日銀グランプリ」キャンペーンからの提言の決勝大会開催

二〇一五年十二月五日（土）

▼大学生を主な対象とする金融経済分野の小論文・プレゼンテーションのコンテスト「第十二回日銀グランプリ」キャンペーンからの提言の決勝大会を本店において開催しました。テーマは「わが国の金融への提言」。わが国の金融に関する課題の指摘と、それに対する処方箋の提案を競ってもらいました。全国各地の三七大学から一〇九編の論文が寄せられ、一次審査の結果、五チーム（東京国際大学、慶應義塾大学、成城大学、弘前大学、学習院大学）が決勝に進出しました。

▼決勝大会では、横尾敬介氏（経済

同友会副代表幹事、専務理事）、藤沢久美氏（シンクタンク・ソフィアバンク代表）の他、岩田規久男日銀副総裁（審査員長）、石田浩二・佐藤健裕両審議委員の五名の審査員を前に、各チームとも堂々とプレゼンテーションと質疑応答を行いました。

▼最優秀賞には、弘前大学チームの「地方中小企業向け『健康プログラム』の可能性」医学（社会学）と行動経済学の知見をふまえて」が選ばれました。

「既存の『健康融資制度』の改善スキームを、行動経済学等の観点を取り入れたプログラムを組み合わせて



大勢の方が観戦するなか行われたプレゼンテーション



最優秀賞に輝いた弘前大学チームと審査員の皆さん

て考案し、現実味のある提案を行っている」点などが高く評価されました。この他、優秀賞二チーム、敢闘賞二チーム、特別賞一チームを以下の通り選出しました。

【優秀賞】（応募受付順）

●慶應義塾大学理工学部チーム

「公的年金制度三世、一体の改革」マイナンバー／人口動向シミュレーションを用いた公的年金の役割の再確認と持続性への改革提言」

【優秀賞】 および 【特別賞】

●成城大学社会イノベーション学部チーム

「日銀ナビゲーター」

編集後記

■今回のインタビュー・対談に登場していただいたのは、「映画字幕翻訳者」の戸田奈津子さんと「アートディレクター」の北川フラムさんでした。戸田さんには、映画字幕翻訳者の道をどのように切り拓いてこられたかという点を中心に話をいただきましたが、その中で作品やスターの話題がてんこ盛りに飛び交い、映画好きの私としては興奮冷めやらぬインタビューとなりました。また、北川フラムさんからは如何に美術家と地域住民が共鳴できるか、そこに至るまでのご苦労も語っていただきました。私自身は岡山支店で勤務していたころに瀬戸内国際芸術祭をみる機会があったため、その情景を思い浮かべながら大変興味深くお聞きしました。お二人の話をお聞きして思いついた言葉が「好きこそものの上手なれ」です。お二人の映画や芸術、スターや地域に対する愛情や情熱は、筆舌に尽くしがたい領域に達しているのではないかと感じましたが、今回何とか文章にまとめてみました。これらの記事を読まれたうえで、戸田さんが翻訳をつけた映画や北川さんがディレクターをしている芸術祭をみると、また格別なのではないでしょうか？ 読者の皆様には、ぜひお勧めしたいと思います。（高橋）

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。

(http://www.boj.or.jp/announcements/koho_nichigin/index.htm/)

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ (<http://www.boj.or.jp/>) をご覧ください。

にちぎん 2016年春号
編集・発行人 高橋経一
発行 日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町2-1-1
☎03-3277-2405



デザイン 株式会社市川事務所
印刷 文唱堂印刷株式会社
©日本銀行情報サービス局 禁無断転載

*本誌の用紙は、環境・社会・経済のすべての側面に配慮した厳しい基準に従って適切に管理された森林からの木材を原料としていることを示す、FSC認証紙を使用しています。



決勝進出5チームと審査員の皆さん

【敢闘賞】（応募受付順）

●東京国際大学経済学部チーム

「留学生に対するファイナンシャル・インクルージョン促進を目指して―留学生向け『エージェントバンク』設立提案―」

●学習院大学経済学部チーム
「クラウドファンディングを利用した江戸城再建と日本の森とシンボルの再生」

▼審査員からは、「多様な問題点や課題を把握し、それを

解決する具体的で実現可能性が高いと思わせるものだった。また、私たち日本銀行も真摯に耳を傾け、行動することを求められる提言がみられた」「プレゼンテーションも、さまざま工夫がこらされていた。審査員から専門的かつ高度な質問を受けても、自分たちの考えを堂々と提示し、さらに審査員とその場で議論を深めていた。そうした皆さんの姿は大変頼もしく、またうれしく感じた」との講評がありました。

▼日銀グランプリについては、日本銀行ホームページに専用コーナーを

設けて、概要、決勝参加チームの作品全文と審査員講評および佳作論文の要旨を紹介しています。

▼「日銀グランプリ」キャンペーンの要旨は、来年度も開催する予定です。全国各地で一人でも多くの学生の方々が、若者らしい問題意識に基づき、自ら主体的に調べ、考えることを通じて、金融面の課題に挑戦していただくことを心から期待しています。





from London

ロンドン中心部の住宅街の一風景



古く壮麗な建物が立ち並ぶロンドン中心部の住宅街

左下の写真をご覧ください。ロンドン中心部の住宅街で近年よく見かけられるこの光景、一体何が起きているか、おわかりになるでしょうか？ 実はこれ、住宅の地下増築工事の一幕なのです。地下で掘削された土砂が、斜め上に突き出した白い橋のようなもので運び出され、赤い筒から地面に置かれた荷台に吐き出される、という具合です。

世界的な低金利環境が続く中、ロンドンでは住宅価格が上昇を続けており、世界中から住宅市場に投資マネーが流れ込んでいます。こうしたなか、住宅の所有者は、資産価値を高めてより多くの値上がり益を得ようと、競って建物の増改築を行っています。ただ、ロンドンでは古い建物から成る町並みの景観を守るため、地上部分の増改築には厳しい規制が定められており、「上方向」の伸びしろは限定的。ならば「下方向」へというわけで、地下増築を行う投資家が年々増加してきたのです。

もっとも、周辺住民は、工事中の騒音・振動や道路通行への影響だけでなく、工事後の陥没事故の発生リスクへの懸念など、地下工事に対する不満と心配を募らせているようです。このため最近では、一

部の地域で地下増築への規制を強める動きが出てきています。

ただ、規制を強めすぎると、物件取得後の増改築の余地が小さくなる分、その地域の物件の投資対象としての魅力は低下します。そうなれば、周辺住民の住宅の資産価値まで下がってしまうかもしれない。このためか、今のところ、地下増築自体を禁止するといった強力な規制の導入までには至っていません。周辺住民にとって、住環境と資産価値のどちらを優先していくべきか、ここは悩みどころでしょう。

ちなみに、地下増築に使った重機は、地上に引き上げるとコストがかさむため、地下に埋められることも多く、ロンドンの地下はさながら「重機の墓場」のようだとも言われています。「重機のおぼけが出る」とのうわさが広まってロンドンの住宅市場が冷え込む…なんてことにならないよう祈っています。

(イングランド銀行、ロンドン)

*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。



ロンドン中心部の住宅街で見られるこの光景は一体…？



地上部分の増改築も行われているが、高さ制限が厳しくてその余地は限定的

にちぎん 第二巻 第一号 通巻四五号 平成二十八年二月二十五日発行



にちぎん